北村季晴編

中等音樂教科書

（甲種）

卷參

弘樂社出版部發行

教科書文庫
40-1924
01304
58324
43325
教科書文庫
4
760
40-1924
01304
58324

中央図書館

教科書文庫
4
760
40-1924
0130458324

中等音樂教科書

(甲種)

北村季晴編

藤井藏書

弘樂社出版部發行

巻參

広島大学図書
0130458324

緒言

世に樂典の書其類尠なからず。唱歌の集亦頗る多し。然かも如何にしてこの理論と實科との兩者を適當に鹽梅連絡せしめて、秩序系統ある實際的教程を作るべきかは、此の科の教授上最も緊要の問題なるにも係らず、未だ之に關して適當の良著無きは如何。音樂者並びに教育者は、この問題を重要視せざるか。將た其重要なるを知つて、なほ之を等閑に附しつゝあるか。

「音樂科は技術的感情的課程なれば、他の理智的科目の如く、組織的教授を爲し得べきにあらず。」との誤れる臆斷の下に、不秩序なる教授の踏襲せらるゝや久し矣。試みに諸學校に就て、此科の教授細目を視よ。多くは皆若干の歌曲が慢然排列せらるゝに過ぎずして、何等の組織系統あるを見ず。かくて今日甲の歌曲は授けられて、其間何等の連絡も理解も無くんば、次の日乙の歌曲は教へられ、如何でか此科の眞の効果は收め得べき。宣べなり、學生は其讀譜力不充分にして、音樂上の基礎的智識に乏しく、應用の能力亦缺くるを以て、世に出でゝ何等此の科の實際的効果の見るべきもの無き事や。此の如くにして此科は、今猶ほ教育上將た社會上、やゝもすれば輕視せられ、將た度外視せられつゝあるの傾きあり。慨歎に堪へざるなり。

抑も洋式音樂は、其組織の學理的秩序的なる點に於て、教育上有要なる一地歩を占むるものなり。然るにこの組織的なる洋式音樂が、我が教育上、然かく不秩序に取扱はれつゝあるは、頗る矛盾せる現象ならずや。而して余輩は、其然る所以が、前述の如く、理論と實科と相俟ち相應じて、歩々組織的教授を行ふに適すべき、綜合的教科書無きに因ること大なりと信ずるものなり。余輩はこの目的に適ふべき良書の編纂は、極めて至難の事業にして、到底余等淺學のよく之を完成し得べきに非ざることを知ると雖も、然かも不肖自ら量らず、たとへ尺寸たりとも、この樂界の一大缺陷を補はんことを希圖し、即ち歐米に於るこの種の書籍を渉獵參考し、先輩後進の意見と經驗とに聽き、作曲者作歌者の大なる助力に俟ち、夙夜腐心推敲の結果、前後十年の星霜を閲して、僅にこの篇を輯綴することを得たり。この書固より未だ完璧を期すべきに非ずと雖、庶幾くは以て上記の缺陷に對する、應急の要を充たすに足り、又將來這般の書を編まん人の爲に、幾分の參考と成るを得ば、編者が望外の光榮なり。本書中不備の點に關しては、追次之が訂正を期す。識者幸に垂教を惜む勿れ。

本書從來緒言を缺く、玆に大正九年三月、原版改修に際し、初刊當時の舊稿を求めて、以下の二表及凡例と共に追補す。

北村季晴

（第一表）本書卷の三（第三學年）用・教授者教授細目の一例（學期時間割概定）

第一學期　自四月一日　至七月十日（每週二時）約十二週　二十四時間

目次

目次	頁の欄所載	時間割概定	週割	月割
【歌曲】春夜……一		三時間		
【歌曲】いさら川……三				
【歌曲】廣瀨中佐……五				
【歌曲】きのうの思ひ（短調旋律曲）……六		三時間		
第二十三教　音階の六（變嬰種短音階、關係調、同主調）……七				
「修練筒條」（短音階に就て、六）……一二		三時間		
【歌曲】小蝶（日短調例曲）……一三				
【歌曲】貧女（ハ短調例曲）……一五				
【歌曲】名所の松（ト短調例曲）……一七		三時間		
第二十四教　諸表の三（低音部譜表、大譜表）……一八				
「問題」（低音部譜表に就て、三）……二一		三時間		
【歌曲】夕の鐘（伴奏附き單音唱歌、低音部譜表の應用）……二五				
【歌曲】殖民の歌（同）……二九		三時間		
【歌曲】夏野（同）……三二				
第二十五教　唱歌の種類（單音唱歌及輪唱歌）……三三				
【歌曲】流れ（二部輪唱歌）……三四				
【歌曲】鶯（同）……三五				
【歌曲】紋遺火（同）……三六				
【歌曲】樂しき世（同）……三七		六時間		
【歌曲】舞踏（伴奏附き單音唱歌）……四一				
【歌曲】漁村の夕（三部輪唱歌）……四二				
【歌曲】自戒（同）……四三				
【歌曲】映景（カノン）……四五				

理論科、三……約三時間　計、二十四時間

一學期間學習事項一覽

一、曲……約二時間

第二學期　自九月一日　至十二月十日（每週二時）約十二週　二十四時間

目次

目次	頁の欄所載	時間割概定	週割	月割
第二十六教　男女の聲域……四六				
重音唱歌學習上の注意……四八		二時間		
【歌曲】村祭（二重音唱歌）……四九				
「練習曲」（重音式音階練習、六）……五一				
【歌曲】愛國の歌（二重音唱歌）……五二		三時間		
【歌曲】友のつどひ（同）……五三				
【歌曲】歌の松波（伴奏附き二部唱歌）……五七		四時間		
第二十七教　音程の三（六度音程）……五八				
「練習曲」（六度音程練習、四）……五九		三時間		
【歌曲】都の夜（二重音唱歌）……六二				
【歌曲】旅情（同）……六三				
【歌曲】磯の月（伴奏付き二部唱歌）……六七		四時間		
第二十八教　總論の一（樂語論、樂合補說）……六八				
【歌曲】維新の志士（二重音唱歌）……七九				
【歌曲】門の椎の木（同）……八一		八時間		
【歌曲】那須與一（伴奏付き二部唱歌）……八五				

理論科、三（聲域、六度音程、樂語論、總合補說）……約三時間　計、二十四時間

一學期間學習事項　總計

練習曲、二……約二時間

歌曲、一〇……約一九時間

第三學期　自一月八日　至三月十日（每週二時）約七週　十四時間

目次

目次	頁の欄所載	時間割概定	週割	月割
第二十九教　音階の七（七音の特質、長短音階、識別法、轉調、移調等）……八六				
【歌曲】新年の海（二重音唱歌）（轉調例）……九三		四時間		
【歌曲】窓の梅（同）……九七				
【歌曲】蹴鞠（同）……九九		四時間		
第三十教　總論の二（音階論、總合補說）……一〇〇				
【歌曲】川邊に立ちて（二重音唱歌）……一〇五		二時間		
【歌曲】夢（同）……一〇七				
【歌曲】菅公（伴奏付き二部唱歌）……一二五		四時間		

理論科、二（七音特質、長短音階識別法、轉調、移調、音階論總合補說）……約三時間　計、十四時間

一學期間學習事項　總計

歌曲、六……約一一時間

理論科、八……約九時間

（內譯）嬰種及變種短音階、關係調、同主調、ヘ字記號、低音部譜表、大譜表、連合譜表、唱歌の種別、單音重音及輪唱歌、男女聲域、六度音程、七音の特質、靜止音、轉調移調、樂譜總論、音階總論、「問題」一、「修練條條」一

練習曲、二種……約二時間

歌曲、三四……約五一時間

（內、單音、一一、輪唱歌、七、二重音、一六）

（歌曲內容の詳細は別紙第二表にあり）

（第二表）第三卷に配當せる曲歌の內容・目的・作曲作歌者名・並に其統計表

第一學期

歌曲題名	曲體	曲趣	調	拍子	音域	目的	作曲者	作歌者	所載頁
【歌曲】春夜	單音唱歌	閑雅	ホ調	C	ニ—ニ	復習	石原重雄	中島角次	一
【歌曲】いさら川	同	流麗	ホ	6/8	ホ—ホ	同	編者	吉丸一昌	三
【歌曲】廣瀨中佐	同	勇健	ハ	2/4	ハ—ハ	同	F. Kücken（獨）	同	五
【歌曲】きのうの思ひ	同	幽靜	イ	6/8	ホ—ハ	復習後編	編者	同	六
【歌曲】夕の鐘	同 伴奏附	流暢	ニ	C	ニ—ニ	低音部譜表例	編者	岩野美術	一五
【歌曲】殖民の歌	同	勇健	ハ	6/8	ハ—ホ	同	Palestrina（英）	中島角次	一七
【歌曲】夏野	同	晴朗	ヘ	C	ヘ—ヘ	同	編者	吉丸一昌	二五
【歌曲】流れ	二部輪唱歌	樂しく	ハ	C	ハ—ハ	二部輪唱習	編者	同	三四
【歌曲】鶯	同	優美	ト	3/4	ニ—ホ	同	編者	同	三五
【歌曲】紋遺火	同	快活	ホ	C	ホ—ホ	同	編者	同	三六
【歌曲】樂しき世	同	樂しく	ト	C	ニ—ト	二重音唱歌練習	Mather（英）	吉丸一昌	四五
【歌曲】舞踏	同	勇健	ヘ	C	ハ—ヘ	同	同	同	五二
【歌曲】漁村の夕	三部輪唱歌	平穩	ト	3/4	ハ—ホ	同	Hofmeister（獨）	同	五三
【歌曲】自戒	同	晴朗	ヘ	4/4	ハ—ニ	同	編者	同	五七
【歌曲】映景	カノン	快活	ホ	4/4	ロ—ホ	同	L. W. Mason（米）	同	六一
【歌曲】春夜	同	溫雅	ニ	C	ニ—ニ	同	編者	三宅雄二郎	一
【歌曲】村祭	二重音唱歌	樂しく	ト	C	ニ—ト	二重音唱歌練習	Kücken（獨）	吉丸一昌	四九
【歌曲】愛國の歌	同	勇健	ヘ	C	ハ—ヘ	同	Mather（英）	同	五二
【歌曲】友のつどひ	同	快活	ト	C	ニ—ホ	同	Hofmeister（獨）	同	五三
【歌曲】歌の松波	同 伴奏附	溫和	ホ	3/8	ニ—ホ	同	編者	同	五七
【歌曲】那須與一	二重音唱歌	優快	ト	2/4	ロ—ホ	同	L. W. Mason（米）	同	六一

第二學期

歌曲題名	曲體	曲趣	調	拍子	音域	目的	作曲者	作歌者	所載頁
【歌曲】維新の志士	同	樂しく	ト	C	ニ—ニ	同	編者	三宅雄二郎	七九
【歌曲】門の椎の木	同	勇健	ヘ	C	ハ—ヘ	同	同	吉丸一昌	八一
【歌曲】那須與一	同	快活	ト	C	ニ—ホ	同	同	同	八五
【歌曲】都の夜	二重音唱歌	優快	ト	2/4	ロ—ホ	同	同	同	九一
【歌曲】旅情	同	溫和	ホ	3/8	ニ—ホ	同	同	同	九五
【歌曲】磯の月	伴奏付き二部唱歌	靜穩	ロ	3/4	ハ—ヘ	同	同	同	九七
【歌曲】村祭	二重音唱歌	樂しく	ト	C	ニ—ト	二重音唱歌練習	Kücken（獨）	吉丸一昌	九九
【歌曲】愛國の歌	同	勇健	ヘ	C	ハ—ヘ	同	Mather（英）	同	一〇二
【歌曲】友のつどひ	同	快活	ト	C	ニ—ホ	同	Hofmeister（獨）	同	一〇三
【歌曲】流れ	二部輪唱歌	樂しく	ハ	C	ハ—ハ	二部輪唱習	編者	同	一〇六
【歌曲】鶯	同	優美	ト	3/4	ニ—ホ	同	編者	同	一〇七
【歌曲】紋遺火	同	快活	ホ	C	ホ—ホ	同	編者	同	一〇八
【歌曲】樂しき世	同	樂しく	ト	C	ニ—ト	同	Schumann（獨）	吉丸一昌	九三
【歌曲】舞踏	同	勇健	ヘ	C	ハ—ヘ	同	Weber（獨）	同	九五
【歌曲】漁村の夕	三部輪唱歌	平穩	ト	3/4	ハ—ホ	同	Abt（獨）	同	九九
【歌曲】自戒	同	晴朗	ヘ	4/4	ハ—ニ	同	民謡	同	一〇三
【歌曲】映景	カノン	快活	ホ	4/4	ロ—ホ	同	Schumann（獨）	同	一〇六
【歌曲】都の夜	二重音唱歌	優快	ト	2/4	ロ—ホ	同	Abt（獨）	同	一〇八

第三學期

歌曲題名	曲體	曲趣	調	拍子	音域	目的	作曲者	作歌者	所載頁
【歌曲】旅情	同	樂しく	ト	C	ニ—ト	同	編者	三宅雄二郎	一一
【歌曲】磯の月	伴奏付き二部唱歌	靜穩	ト	6/8	ロ—ト	同	同	吉丸一昌	一四
【歌曲】新年の海	二重音唱歌	壯大	ハ	C	ハ—ト	同 轉調例	Schumann（獨）	吉丸一昌	九三
【歌曲】窓の梅	同	流暢	ハ	4/4	イ—ホ	同	Weber（獨）	同	九五
【歌曲】蹴鞠	同	活潑	ハ	2/4	ハ—ハ	同	Abt（獨）	同	九九
【歌曲】夢	同	靜穩	ロ	3/4	ロ—ト	同	民謡	同	一〇三
【歌曲】菅公	同 伴奏附	悲哀	ト	C	ハ—ト	同	Schumann（獨）	同	一〇六
【歌曲】川邊に立ちて	同	壯大	ハ	C	ハ—ハ	同 轉調例	Weber（獨）	同	九五
【歌曲】夢	同	悲哀	ニ	C	イ—ハ	同	同	同	一〇七
【歌曲】蹴鞠	同	活潑	ハ	2/4	ハ—ハ	同	Abt（獨）	同	九九
【歌曲】菅公	同 伴奏附	流暢	ハ	4/4	イ—ホ	同	Weber（獨）	同	九五

計、參拾四曲

內譯

【本邦人作曲】	七	單音唱歌	七
【西洋曲】	二七	同 伴奏附	四
		輪唱歌	七
		二重音唱歌	二
		同 伴奏附	四

一、四分の四拍子	一九	一、ハ調	六
二、四分の二拍子	五	二、ロ短調	八
三、四分の三拍子	四	三、ハ調	一
四、八分の三拍子	一	四、イ短調	一
五、八分の六拍子	五	五、ヘ調	一
		六、ニ調	一

○歌趣類別

一、國體に關する歌……二
二、教訓の歌……三
三、季節に關する歌……一四
四、運動體育等に關する歌……一四
五、地理に關する歌……二
六、歷史に關する歌……四
七、雜歌……八

○曲趣類別

一、快活、和樂等の趣きあるもの……一一
二、流暢、優美、溫雅、靜穩等の趣あるもの……一四
三、勇健、壯大の趣きあるもの……四
四、悲哀、哀憐等の趣きあるもの……五

凡例（教授者へ）

一、本書は師範學校、中學校、高等女學校等　中等程度の學校の音樂科教科用書に充てんが爲編したるものなり。

一、前頁に掲げたる二樣の表中、第一表は、參考として、本書所載の教材を各學期の時間に配當し、其連絡、進度、成績等の樣を示したるものなるが、諸學校に於ける該科の狀況及授業時數等、固より一樣ならざるを以て、教授者は適宜之を取捨斟酌せられんことを望む。（この表は四卷を合せて一應通覽參照せられ度し。）

本表の授業時數は、毎學期の始より、其期の末月の十日まで（爾後を試驗期と見做し）の日數中より、祝日其他の休業日として、毎學期二週（四時間）を控除し、之を以て實際の授業時數と假定したるものなり。（週割と月割とは空欄を存して記入に備ふ。）

一、樂典は、從來の如く、別冊によりて抽象的に講義する時は、頗る難解のものと成りて、効果少く、且つ歌曲と密接追次の連絡を保ち難し。本書は樂典の各項目を適宜に小分し、次ぎに掲げたる歌曲に於て、直ちに之を應用實習するの方法を採れり。即ち理論科は各々實科の豫備又は説明となり、歌曲は理論の應用と成りつゝ、趣味と理解と兩々相俟ちて、漸次易より難に進むの組織によるものなり。されば若し所載以外の歌曲を取入るゝ場合には、其前後の連絡關係を考慮し、適當の場所へ之を挿まれんことを望む。

一、本書各學期教材の分量は、最多限を含むものにして、こは學校の情況により、取捨に便ぜんが爲なり。（殊に一理論科に對する應用例曲は、常に二曲以上を掲げたれば、適宜撰擇する事を得べし。）

一、本書中理論科は、一卷二卷に於て綜合補修し、唱歌科は、一二卷は單音、三卷以下、輪唱、二重、三重唱と進み、四卷の末に少許の四重唱（單性）を載せたり。（重音式唱歌は、或は其メロディーのみを取り、單音として授くるを得。）

一、本書は主として、理論と實科との秩序ある連絡を計りたるものなれども、然かもまた一面、該の科の本來の目的たる、趣味の涵養に資すべき良歌曲の撰擇に付ては、更らに一層の考究を費したり。其他「實施的綜合教授書」としての諸種の要項、（例令ば豫備及復習の方法、基本教練の應用、歌曲上諸種の趣味の序次、配當、分量、邦人の作曲と洋曲との關係等）に付ても、編纂上夫々細心の注意を拂ひたるものにして、在來の唱歌集の如く、慢然歌曲を蒐集したるものとは、全く其撰を異にするものなり。（前頁第二表參照）

一、本書は教授の順序上、當初より音名、調名及調號を説かず。先づ諸種の調の階名の讀み方に熟せしめ、第二卷に入りて、初めて諸調音階構成法を説けり。必しも**ハ**調を先きにするは唱歌上無意味なればなり、（學生が**ハ**調は讀み易く、**イ**調**ホ**調等は難しと成すは、從來教授上の缺點なり。）

一、高低の八音に對する、音名の區別は、從來數字譜（略譜）の夫れと混同して、誤まれる者多し。本書には之を訂正したり。大字音、小字音は、歌字のABCとabcとに相當せしめたる名なり。（本書第二卷十一頁及第三卷十九頁參照）

一、上記以外の事は追て教師用參考書を編して、之に詳記せんことを期す。

【附言】

一、本書別に同名の乙種本（文部省檢定濟）あり。即ち或る種の學校に於ける、本書の生徒用本なり、

一、本書中の歌曲は、前記文部省檢定濟のものと同一なるものとす。

本書中の歌曲は、大正九年三月改刷の際、之を前記檢定濟のものと同一に訂正したり。されば其以前のもの（共益商社書店發行）と本書とは、主として歌詞に於て多少の相異あるものとす。

中等

音樂教科書卷の三目次

第一學期

藤井藏書

歌曲

春夜……一頁
いさら川……二
廣瀬中佐……四
きのふの思……六

第二十三教　音階の六……七

〔豫備箇條〕…嬰種短音階…變種短音階…關係調…同主調…〔修練箇條〕

歌曲

小蝶……一二

目次

貧女……一四
名所の松……一六
第二十四教　譜表の三……一八
〔豫備箇條〕……低音部譜表…ヘ字記號…大譜表…連合譜表…「問題」
歌曲
夕の鐘……二三
殖民の歌……二六
夏野……三〇
第二十五教　重音唱歌の一……三二
唱歌の種類……單音唱歌……重音唱歌……輪唱歌
歌曲
雀……三四
勸學……三五

蚊遣火……三六
樂しの世……三七
舞踏……三八
漁村の夕……四二
自戒……四三
曉景……四四
第二學期
第二十六教　重音唱歌の二……四六
聲域……男聲……女聲……男女聲域の名……「重音唱歌學習上の注意」
歌曲
村祭……四九
重音式音階練習曲(六)……五一
愛國の歌……五二

友のつどひ……五三
歌の松波……五四
第二十七教　音程の三……五八
六度音程……短六度音程……長六度音程
六度音程綜習曲……五九
歌曲
都の夜……六〇
旅情……六二
磯の月……六四
第二十八教　總說の一（樂譜論復習補說）……六八
美術……樂譜の効用……樂譜組織に關する事項の復習問題……音符
補說……休止符補說……諸種の記譜法……中音部譜表……重嬰及び
重變……記譜省略法等

歌曲
維新の志士……七八
門の椎の木……八〇
那須の與一……八二
第三學期
第二十九教　音階の七……八六
七音の特質及び其名稱……短音階の第七度を高むる所以……靜
止音……長短音階識別法……轉調……主調及び附屬調……移調
歌曲
新年の海……九二
窓の梅……九四
競技……九六
第三十教　總說の二（音階論復習補說）……一〇〇

目次

七種の嬰種長短音階……七種の變種長短音階……全音階……半音階……音樂と音階……音階表

歌曲

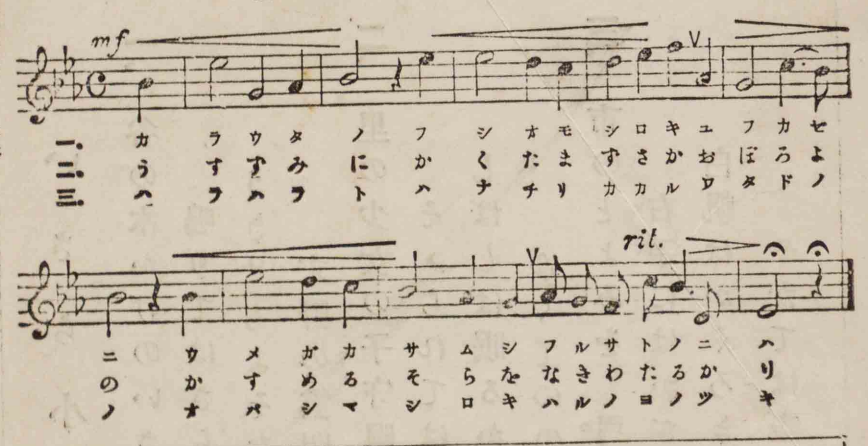
川邊に立ちて……一〇五
夢……一〇六
菅公……一〇八

以上

中等 音樂教科書卷の三目次 終

春夜

〔設問〕一、當曲は何調なりや。
二、最終の音符と休止符との上にある記號〔•〕は如何なる效用をなすものぞ。



春夜

一、唐詩の ふしおもしろき
ゆふ風に、
梅が香寒し ふるさとの庭。

二、薄墨に 書く玉章か
おぼろよの、
霞める空を なきわたる雁。

三、はら〳〵と 花ちりかゝる
渡殿の、
おぼしま白き 春の夜の月。

いさら小川

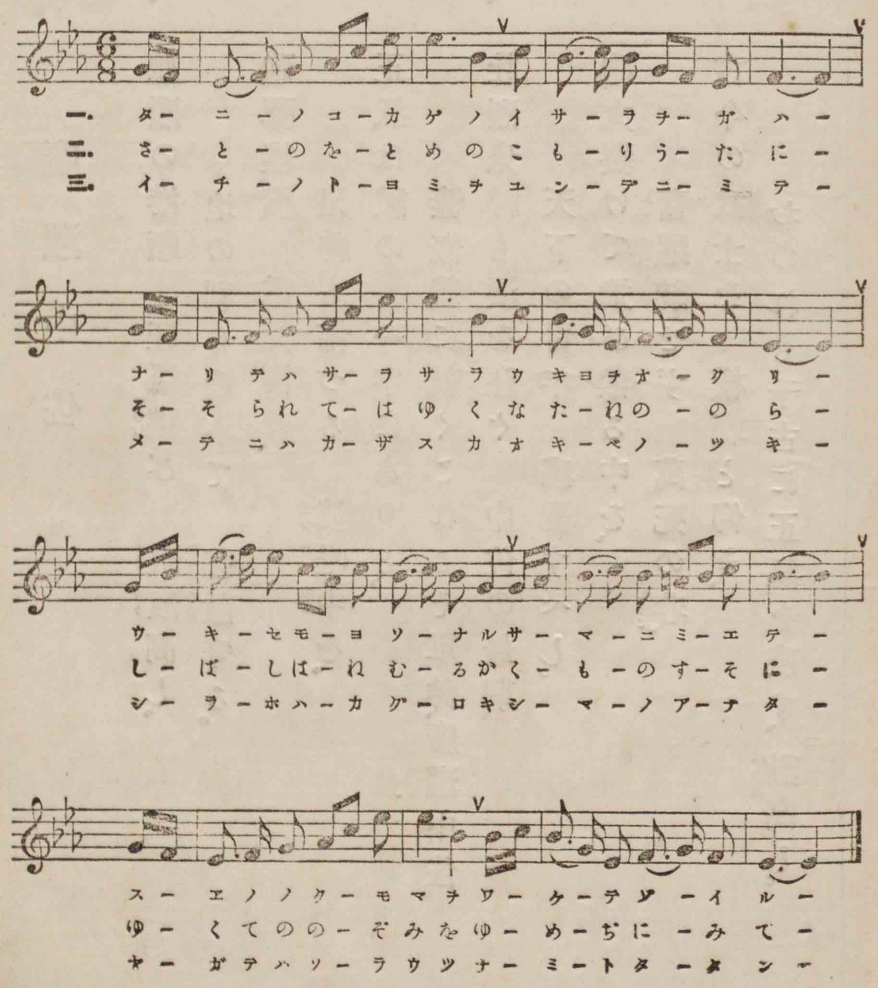
一、谷の木かげのいさら小川、
　鳴りてはさら〳〵　浮世を送り、
　うきせもよそなる　様に見えて、
　　末野の雲間を　分けてぞ入る。

二、里の少女の子守唱に、
　そゝられては行く　なたねの野ら、
　しばしは眠るか　雲の裾に、
　　ゆくてののぞみを　夢路に見て。

三、市のとよみを　弓手に見て、
　右手にはかざすか　沖べの月、
　白帆はかぐろき　島のあなた、
　　やがては空打つ　なみと立たん。

いさら小川

〔設問〕八分の六拍子の小節に於ける、強聲部と弱聲部との位置を問ふ。



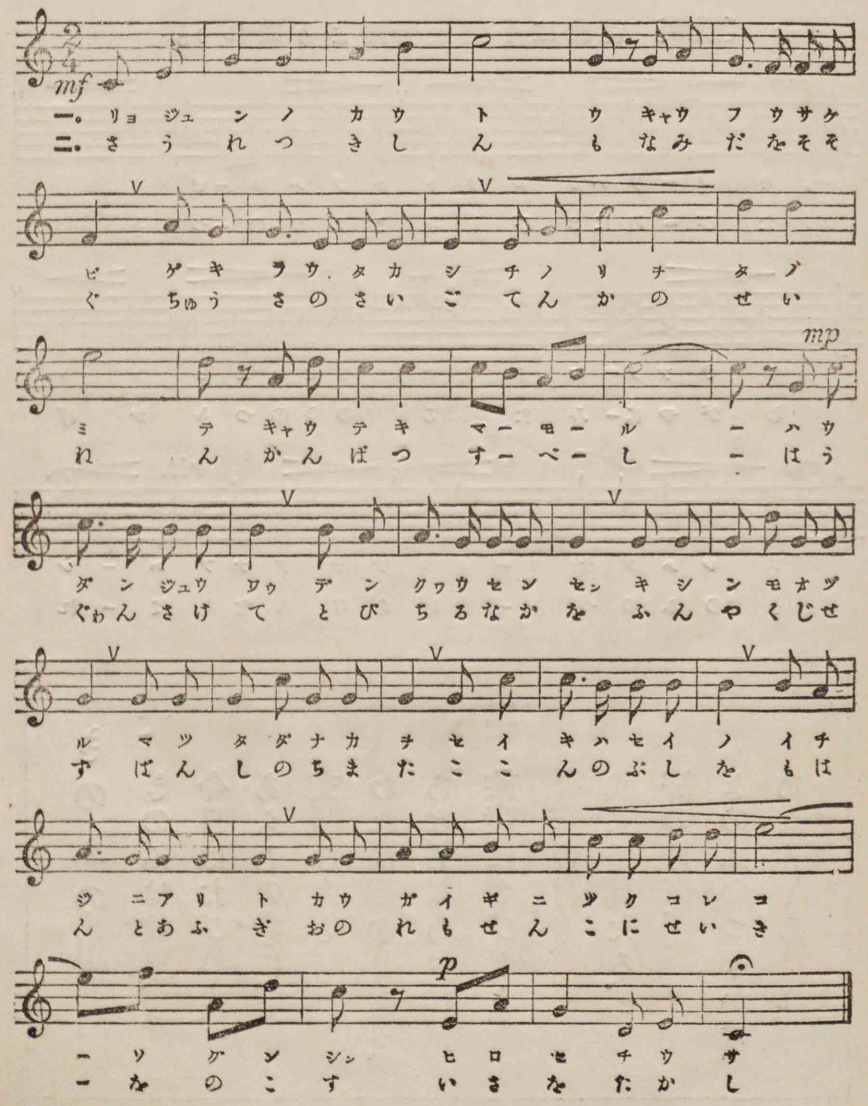
廣瀨中佐

一、旅順の港頭　狂風號び　激浪高し、
　　地の利を頼みて　強敵守る。
　　砲彈縱横　電光閃々、
　　鬼神も怖づる　眞唯中を、
　　正氣は誠の　一字にありと、
　　慷慨義に就くこれこそ軍神、廣瀨中佐。

二、壯烈鬼神も涙を注ぐ　中佐の最期、
　　天下の青年　感發すべし。
　　砲丸裂けて飛び散る中を、
　　奮躍辭せず　萬死の巷、
　　古今の武士を　模範と仰ぎ、
　　おのれも千古に正氣を殘す、勳高し。

廣瀨中佐

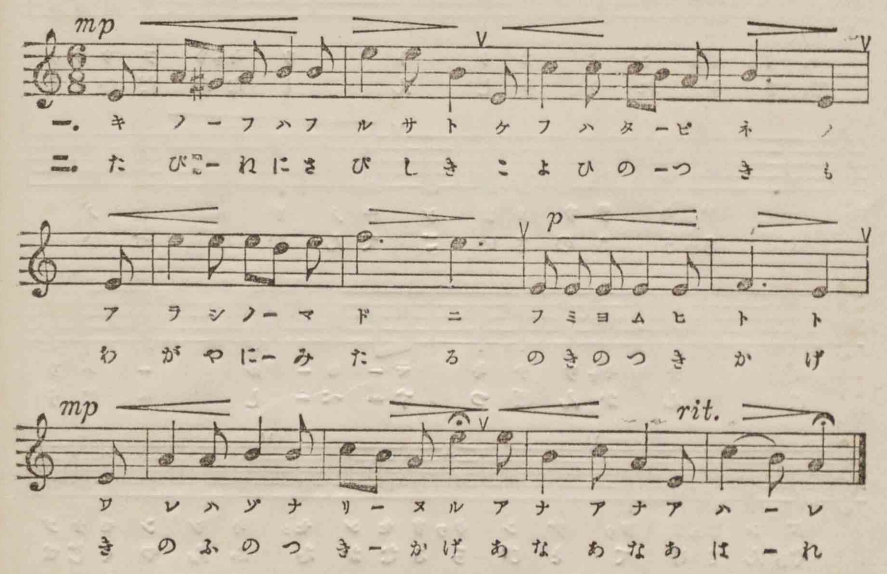
〔設問〕同度の音符に渉れる弧線は、何と云ふ記號にして、何の用をなすものぞ。



きのふの思

〔設問〕 *mp* 及び *p* の記號如何。

〔說示〕 當曲は **イ** 調短音階より成れり。



きのふの思

一、きのふは故里、
今日はたびねの、
あらしの窓に、
文讀む人と、
われはぞなりぬる、
あな〳〵あはれ。

二、旅寢にさびしき、
今宵の月も、
我家に見たる、
軒の月影、
きのふのつきかげ、
あな〳〵あはれ。

第二十三教　音階の六

〔豫備箇條〕

〔設問〕 一、短音階とは如何なる音階なりや。
二、模範短音階とは如何。
三、長音階と短音階との差別は如何。
四、嬰種長音階及び變種長音階とは如何。

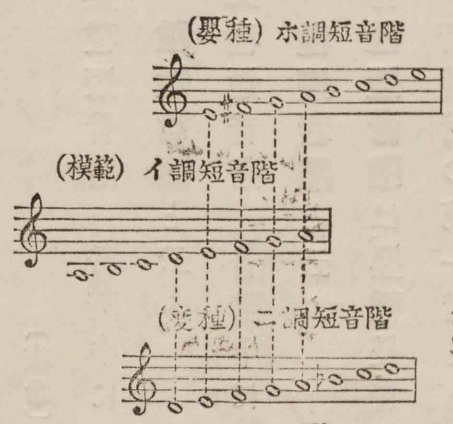
〔說示〕 一、短音階にも亦嬰種及び變種の別あり。

嬰種短音階　音階中に一個以上の嬰音を有する所の短音階を、**嬰種短音階**と云ふ。

變種短音階　音階中に一個以上の變音を有する所の短音階を、**變種短音階**と云ふ。

嬰種短音階は、嬰種長音階に於けるが如く、原音階の第五音を以て新音階の第一音とし、模範短音階の音列を標準とし、嬰を用ゐて

第四十三圖

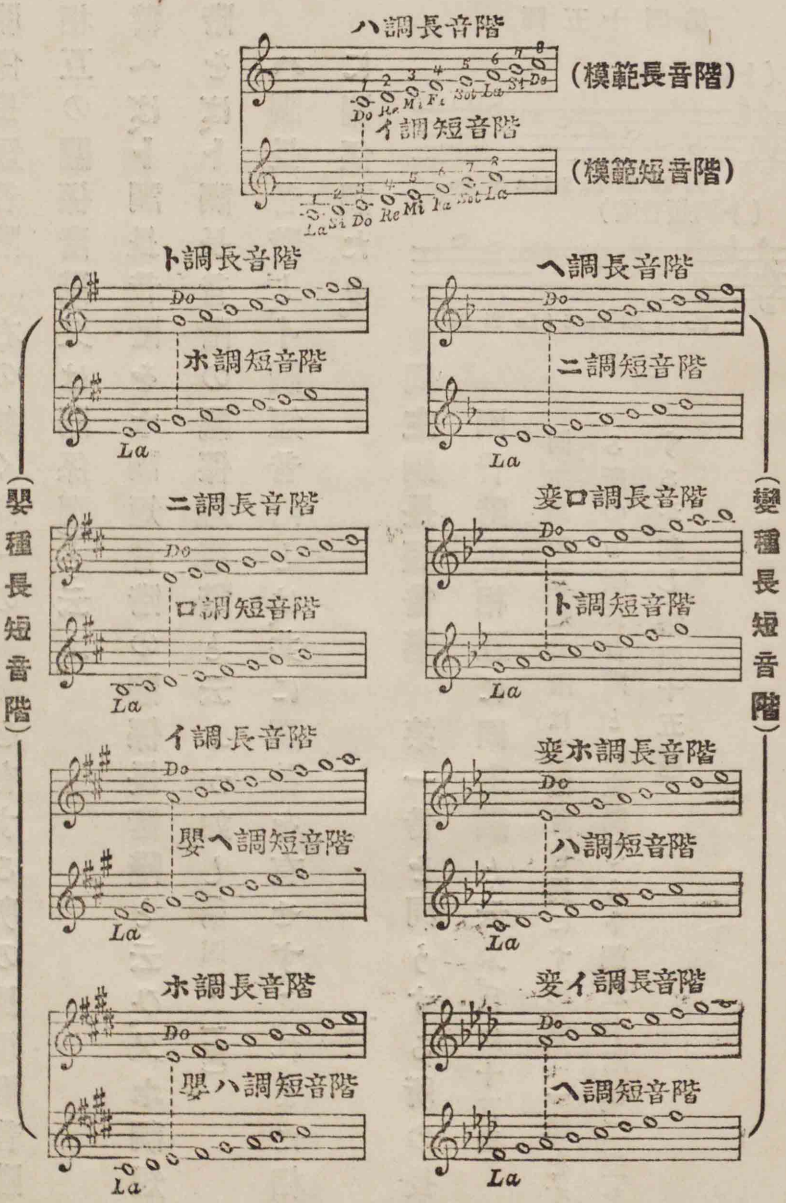


順次に之を構成する事を得べし。(第四十三圖甲)

變種短音階も亦、變種長音階に於けるが如く、原音階の第四音(卽ち下行第五音)を以て、新音階の第一音とし、模範短音階の音列を標準として、變を用ゐて順次に之を構成する事を得べし。(第四十三圖乙)

諸調短音階の音列竝に其調號は、上記の方法によらずして、長音階との關係によりて、容易く之を知ることを得べし。蓋し各調短音階の音列は、皆、調號を同うする所の長音階の音列の、短第三度下(La)より始まりたるものに相等すればなり。(第四十四圖)

第四十四圖



關係長短音階　右の如く、同一の調號を有する所の長短兩音階相互の**關係音階**(又は關係調)と云ふ。

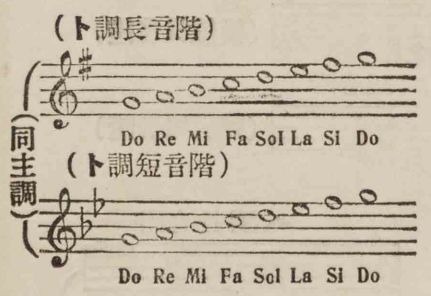
譬へば、**ト**調長音階を**ホ**調短音階の**關係長音階**と云ひ、又**ホ**調短音階をば、**ト**調長音階の**關係短音階**と云ふが如し。(第四十二圖)

ハ調長音階と、**イ**調短音階とは、共に調號を有せず、これまた相互に關係調たり。

同主調、長短音階　第一音を同うする所の長短兩音階を、相互に**同主調**と云ふ。(第四十五圖)

同主調の長短音階は其調號を異にす。例令ば一嬰を有する所の、**ト**調長音階と同主調なる**ト**調短音階は、二變を有するが如し。(第四十五圖)

第四十五圖



修練箇條

〔設問〕一、旋律的短音階及び和聲的短音階とは如何。

二、臨時記號と調號との別如何。

〔說示〕一、短音階の第七音又は第六音に附せらるべき嬰は、之を調號中には記入せず、臨時記號として取扱はるゝものとす。

〔問題〕一、短音階の第一音は、其關係長音階の第何音(上行及び下行)に當るや。

二、長音階の音列は、常に其關係短音階の第何音より始まるや。

三、**ニ**調長音階の關係短音階は何調なりや。

四、**ニ**調短音階の關係長音階は何調なりや。

五、四變を有する短音階は何調ぞ。

六、**ホ**調短音階及び**ハ**調短音階の調號竝に其音列を記せ。

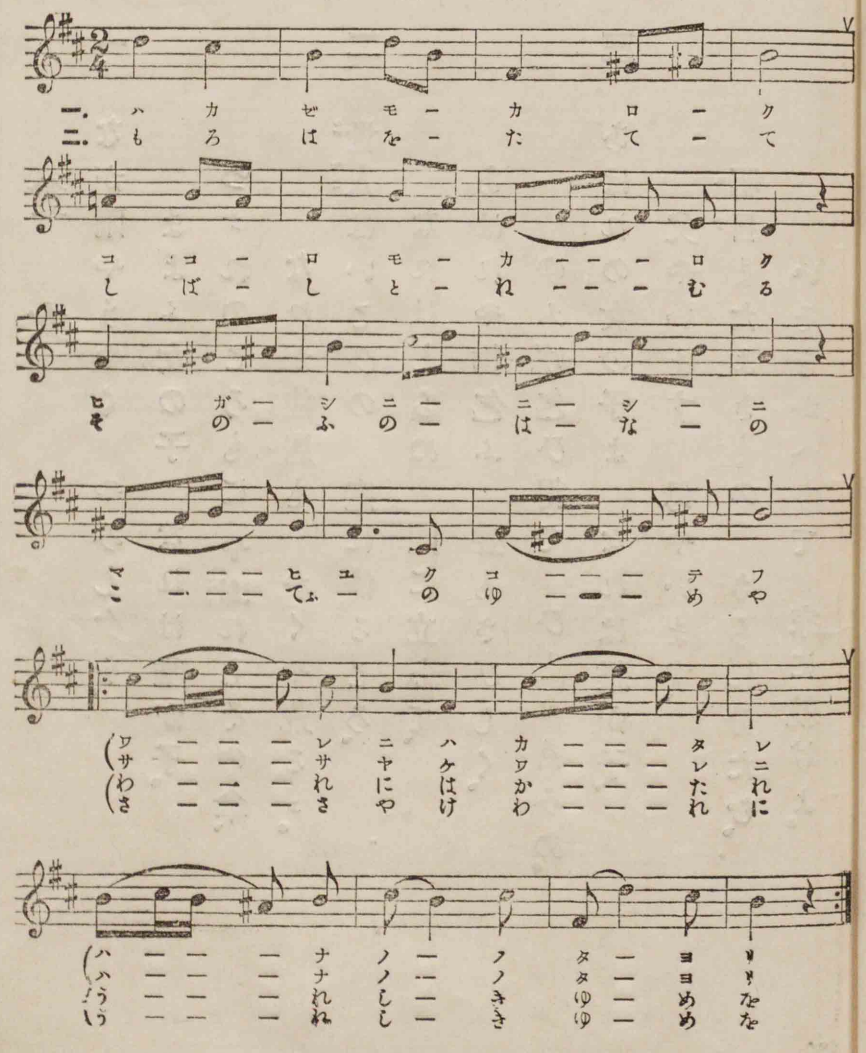
小蝶

一、羽風も輕くこゝろも輕く、
東に西にまひゆく小蝶、
われには語れ花野のたより、
さゝやけわれに花野のたより。

二、双羽を立てゝしばしと眠る、
園生の花の小蝶の夢や、
われには語れ嬉しき夢を、
さゝやけわれに嬉しきゆめを。

小蝶

〔設問〕當曲は短音階より成れり。何調なりや。
〔説示〕樂曲の長音階より成れるか、將た短音階より成れるかを識別せんには、先づ曲の最終の音を檢すべし、蓋し長音階の曲は Do を以て終止し、短音階の曲は La を以て終止する事多ければなり。尚ほ委くは後章に之を説けり。



貧女

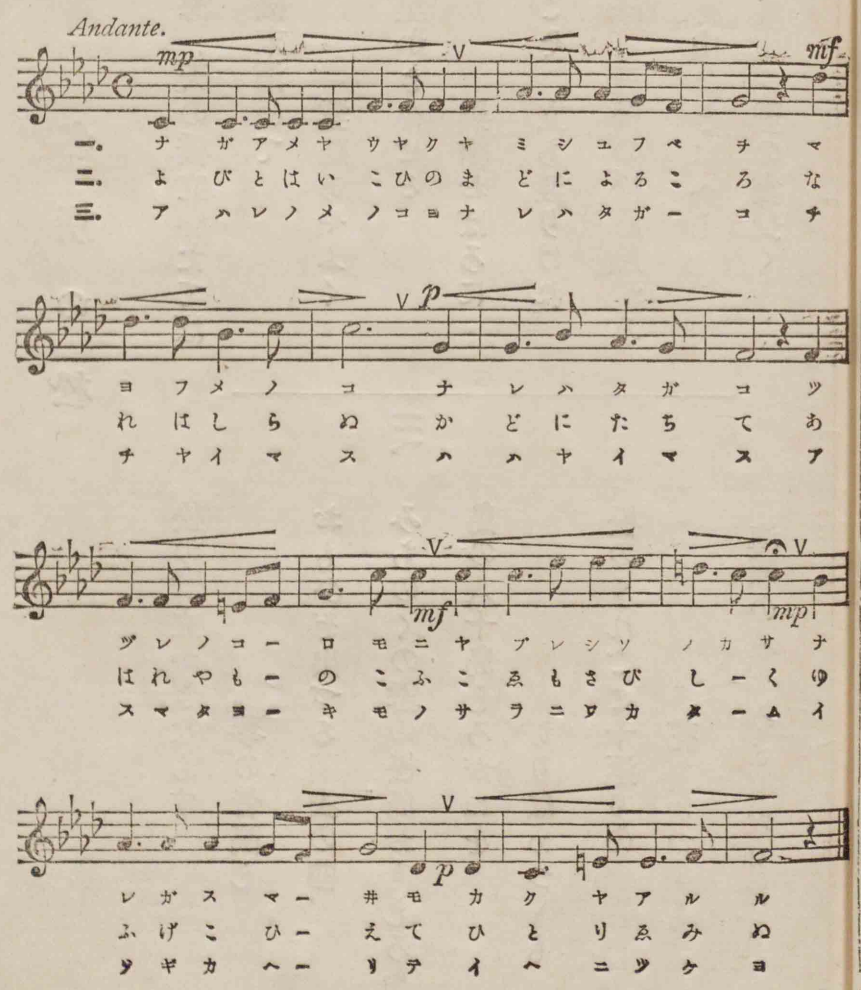
一、ながあめやうやく　やみし夕を、
　まよふ女の子　なれは誰が子、
　つゞれのころもにやぶれしその傘、
　なれが住居も　かくや荒るゝ。

二、世人はいこひの　窓に倚るころ、
　なれはしらぬ　門に立ちて、
　あはれや物乞ふ　聲もさびしく、
　ゆふげ乞ひ得て　ひとりゐみぬ。

三、あはれの女の子よ　なれは誰が子、
　父やいます　母やいます、
　明日またよきもの　さらに分たむ、
　いそぎかへりて　家に就けよ。

貧女

〔設問〕當曲もまた短音階より成れり。何調なりや。



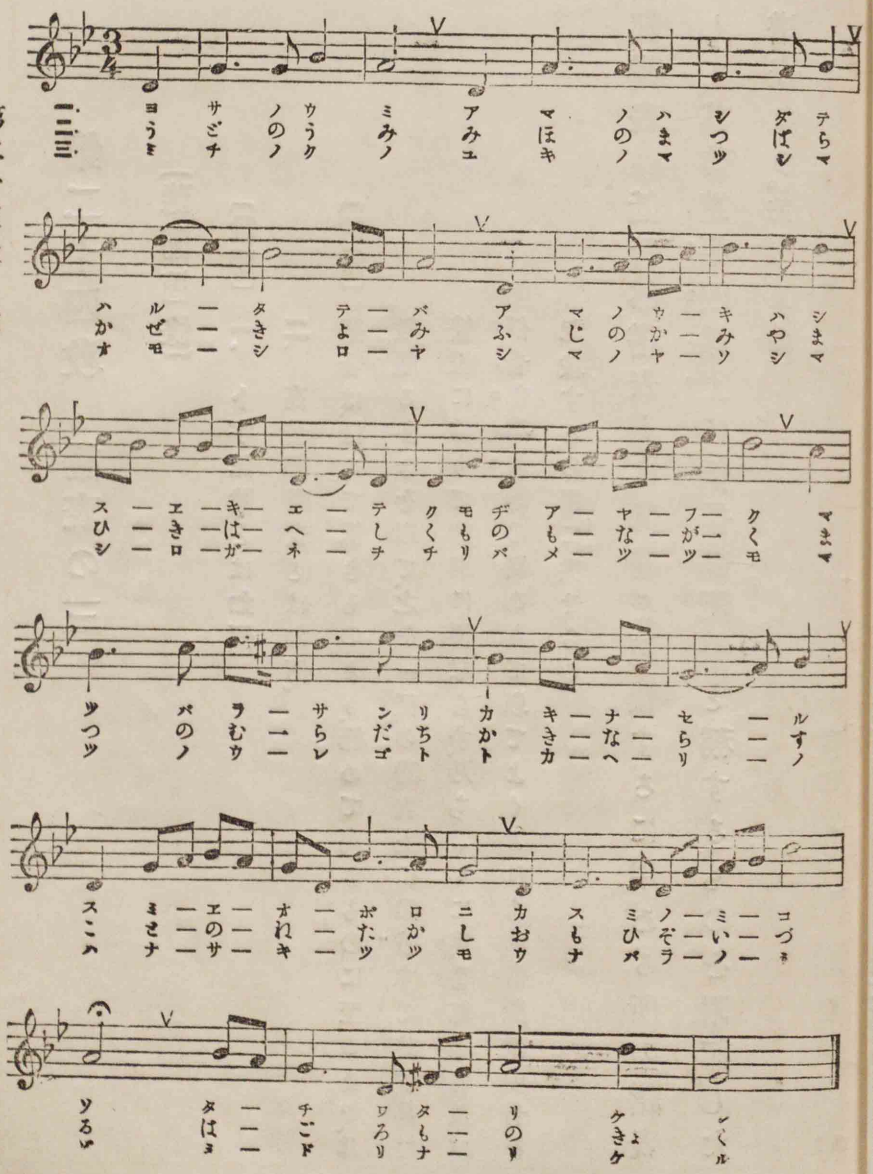
名所の松

一、
與謝(よゝ)の海　天の橋立春たてば
天の浮橋末消にて
　　雲路あやふく
松原三里かきなせる
　　黑繪おぼろに
霞のみこそ　立ち渡りけれ。

二、
有渡(うゞ)の海　三保の松原風淸み
富士の神山ひきはへし
　　雲の裳長く
松の群立かきならす
　　琴の音高し
おもひぞ出づる羽衣の曲。

三、
みちのくの雪の松島おもしろや
島の八十島しろがねを
　　ちりばめつゝも
松のうれごゝ十返りの
　　花さきつゝも
海原のみぞみどりなりける。

名所の松



第二十四敎　譜表の三

〔豫備箇條〕

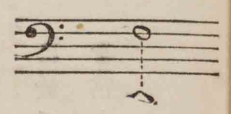
〔設問〕一、ト字記號とは如何。

二、高音部譜表とは如何。

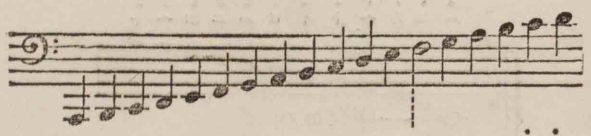
〔說示〕樂音は、極めて低きものより、極めて高きものに至るまで、其數頗る多きを以て、之を一種の譜表上に記載する時は、甚だ繁雜に渉りて識別に便ならず、乃ちこゝに高音部譜表及び低音部譜表等の別ありて、以てよくこれら高低數多の音を記載するの用に供せらる。

低音部譜表　低音部譜表とは、低音を記載するに用ゐる所の譜表にして、其首端第四線上に、**低音部記號**と稱するものを附記したる譜表なり。(第四十六圖)

第四十六圖



第四十七圖



低音部譜表上に於ける諸音の位置。低音部記號は、また之を**ヘ字記號**とも稱へ、譜表上この記號の置かれたる所(即ち第四線)は、**ヘ**音(小字)なることを表示するものなり。(第四十六圖)

故に低音部譜表上の諸音の位置は、此の**ヘ**音を起點として、其上には**ト**、**イ**、**ロ**等、下には**ホ**、**ニ**、**ハ**等と順次に計へて、之を指定し得べし。(第四十七圖)

〔設問〕三、高音部譜表上、高度を異にせる同名の音は、如何に呼び別けられしや。

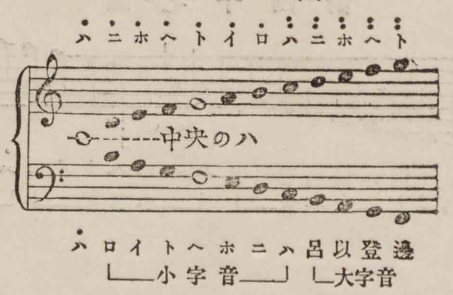
四、高音部譜表上、小字**イ**音、一點小字**イ**音、及び二點小字**イ**音の位置を問ふ。

小字音以下の七音を、大字音と云ひ、また大字音以下の七音は、之を一點大字音と云ひて、文字の下に小點を附して區別せらる。(第四十七圖)

大譜表

高音部譜表と低音部譜表とを、縱線と鈎線とを以て連結したるものを、**大譜表**と云ふ。今大譜表上の諸音の位置を示せば上の如し。(第四十八圖)

第四十八圖



高低兩譜表の中間なる、一點小字**ハ**音は、又之を**中央のハ**と稱ふ。(第四十八圖)

大譜表は、有鍵樂器(風琴洋琴)の樂曲、又は男女合唱の重音唱歌を記載するの用に供せらるゝものなり。

有鍵樂器に於ては、高音部譜表上の音符を右手にて奏し、低音部譜表上の音符を左手にて奏するを例とし、又唱歌に於て、女聲は高音部譜表上に記載せられ、男聲は低音部譜表上に記載せらるゝを常とす。

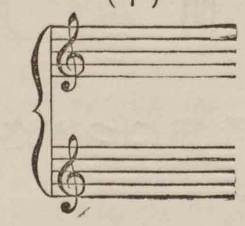
但し便宜上、高音部譜表上に男聲を記載することあり、この場合には、記載せられたる音より、實際八音下にて唱謠せらるゝものと知るべし。

連合譜表

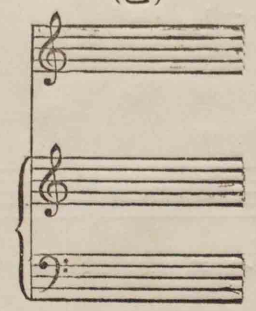
二個以上の高音部譜表(若くは低音部譜表)を連合し、又は大譜表の上に更に一個以上の譜表を連合したるものあり。これらを稱して**連合譜表**といふ。(第四十九圖)

第四十九圖

(甲)



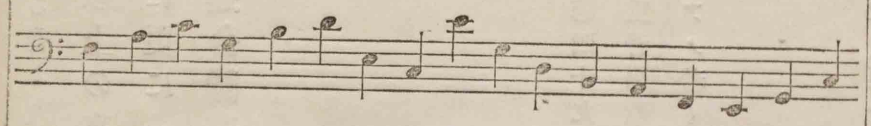
(乙)



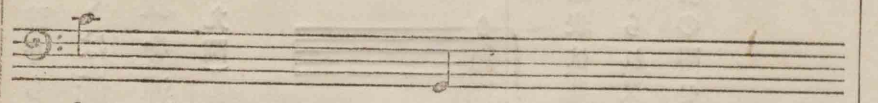
聲樂上に於ては、第四十九圖(甲)の如き連合譜表は、通常、女聲のみ(若くは男聲のみ)を以てする所の重音唱歌を記載するに用ゐられ、又同圖(乙)の如きものは、單音又は復音唱歌に、ピアノ若くはオルガンの伴奏の附せられたるものを記すに用ゐらる。

問　題

(一)。下記の諸音符につき、各其音名を記せ。



(二)。下記の諸音を、低音部譜表上、相當の位置に記入すべし。



ハ　イ　ロ　ト　ホ　ハ　ニ　呂　登　ト　邊　以　波　ハ　ニ

(三)。低音部譜表上に、ヘ調、ト調及び二調長音階の各調號を記載すべし。

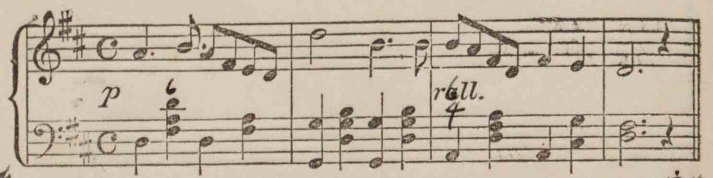
夕の鐘

一、昔の人いまや何處、おとづれ來て佇めば、
たそがれ行く空を辿り、通ひて來る鐘の聲、
家鳩の羽ばたきに、亂れて消ゆ軒のつま。

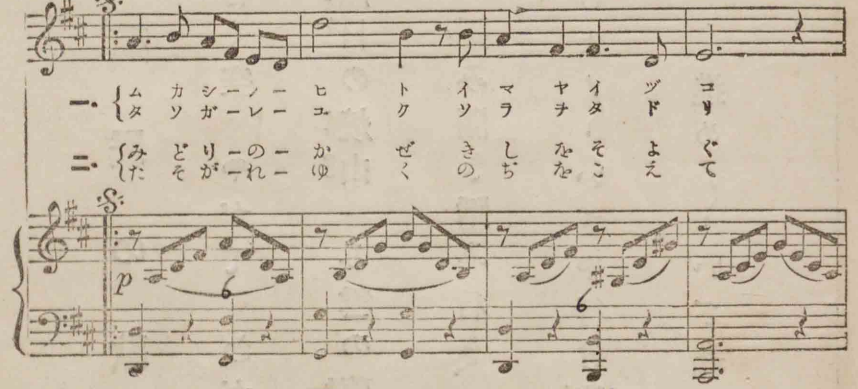
二、翠の風岸をそよぐ、川のほとりさまよへば、
たそがれ行く野路を越えて、訪ひ來る鐘の聲、
牧の子が笛の音に、消えては行く村はづれ。

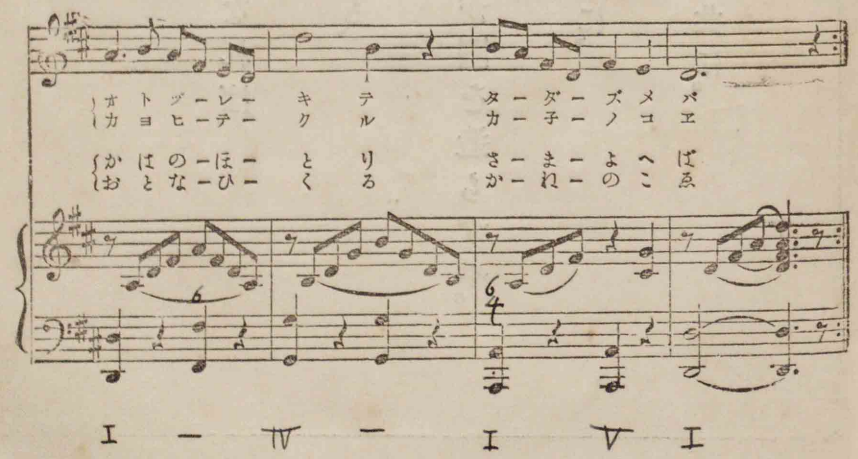
夕の鐘

ピアノ又は
オルガン

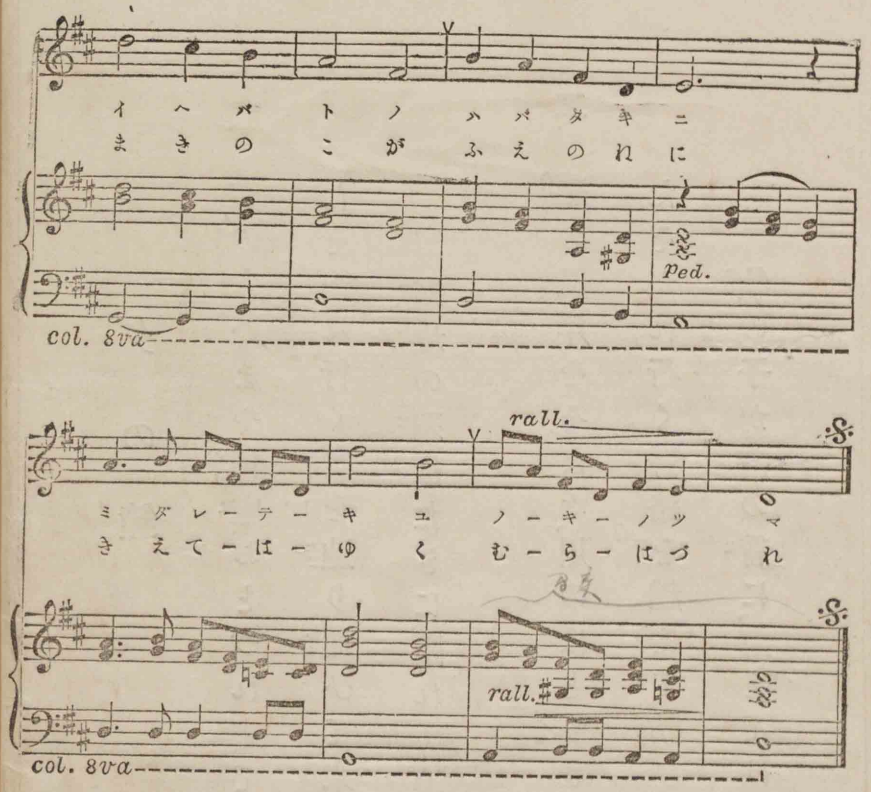


前奏　D: I - - - IV - - - I - V7 I　完結





夕の鐘(つゞき)



〔設問〕一、當曲の如き、三段結び合ひたる譜表を何と云ふや、且つ其用途は如何。

二、當曲譜第二段の始めに於ける、復縦線に添へる二個の點は、如何なる効用をなすものにて、何と呼ばるゝや。

〔説示〕一、𝄋は接續標と云ひ、記號より記號に反りて奏唱すべきことを示すものなり。

二、Col.8va. は、當曲の場合に於ては、八音下の音と共に奏すべきことを示せり。

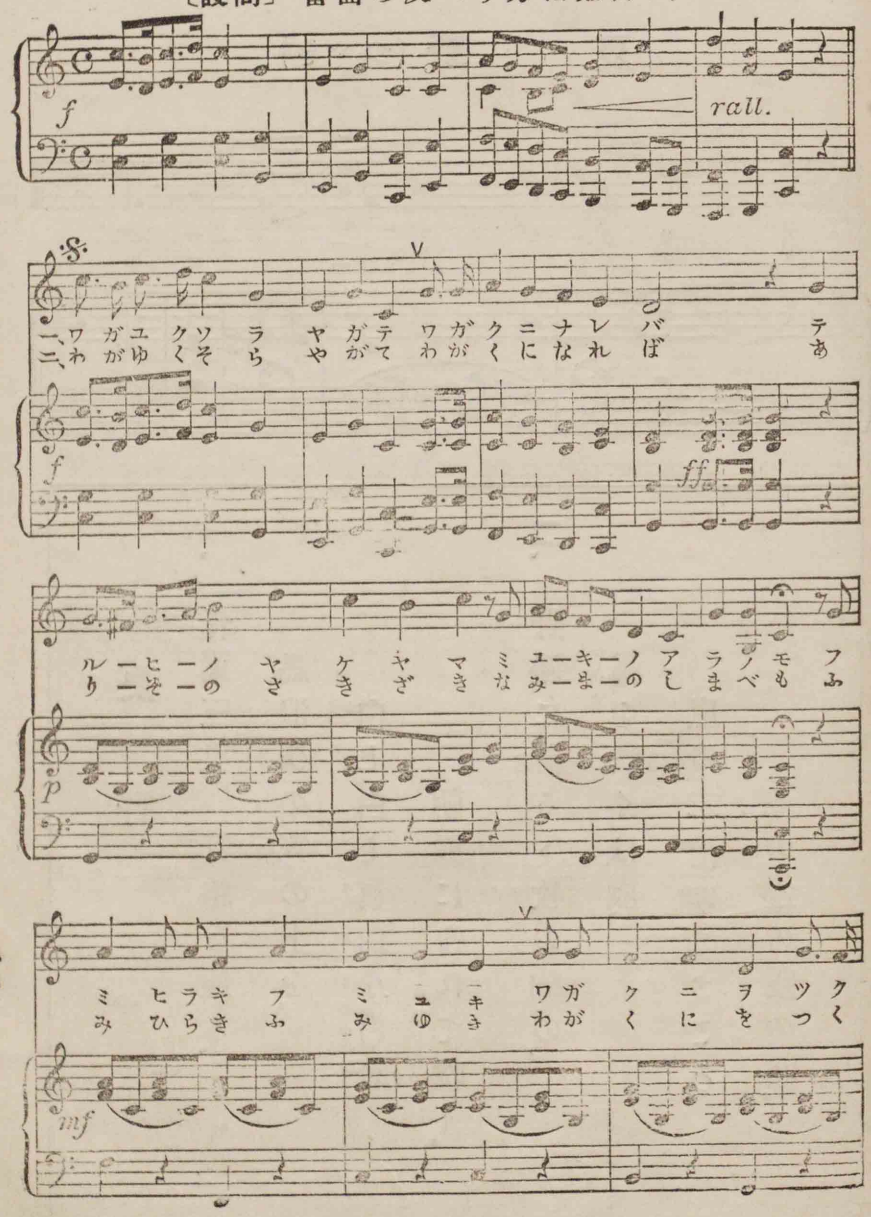
殖民の歌

一、わが行く空　やがて　わが國なれば、
照日の燒山　み雪の荒野も、
蹈み開き蹈み行き、わが國を造らずや。
ゆけよ〳〵いざや行け諸共に、
進め〳〵いざ進め諸共に。

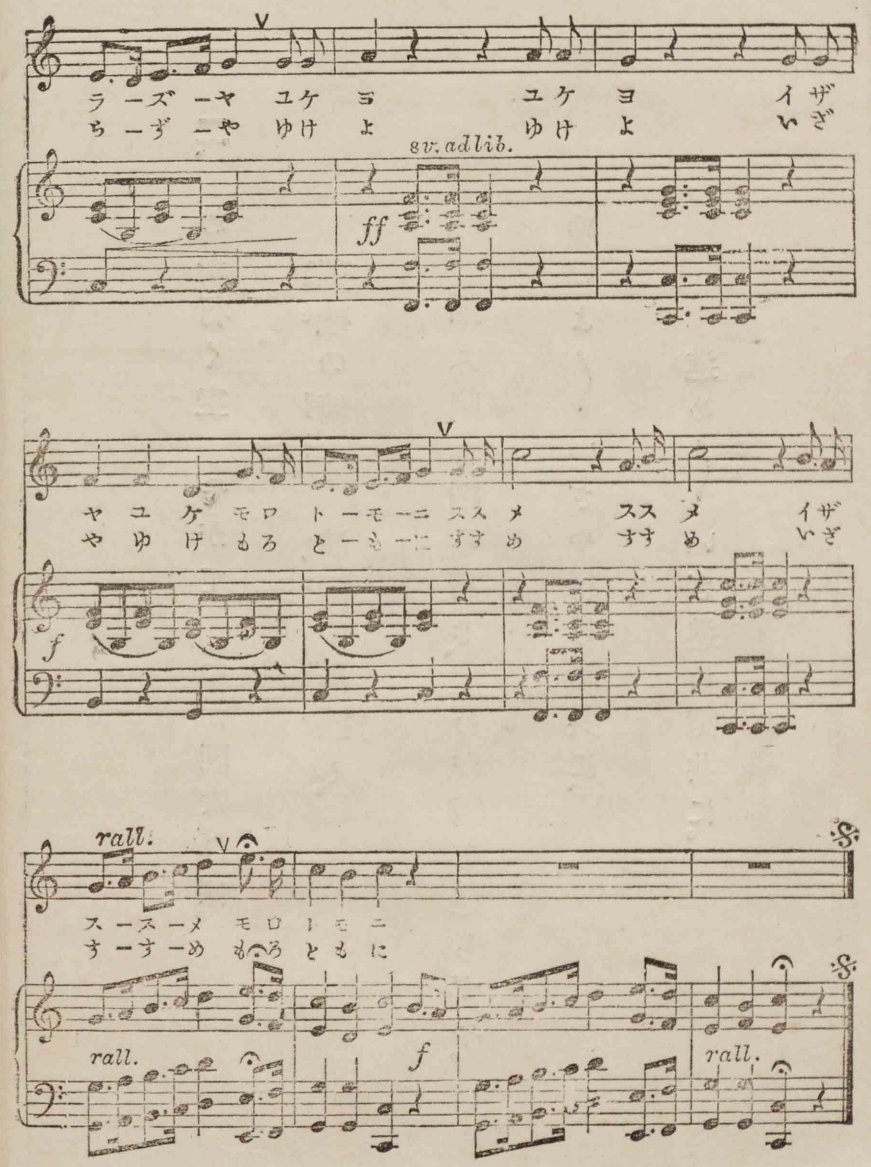
二、わが行く空　やがて　わが國なれば、
荒磯の崎々　波間の島邊も、
蹈み開き蹈み行き、わが國を造らずや。
ゆけよ〳〵いざや行け諸共に、
進め〳〵いざ進め諸共に。

殖民の歌

〔設問〕當曲の反へり方は如何に.

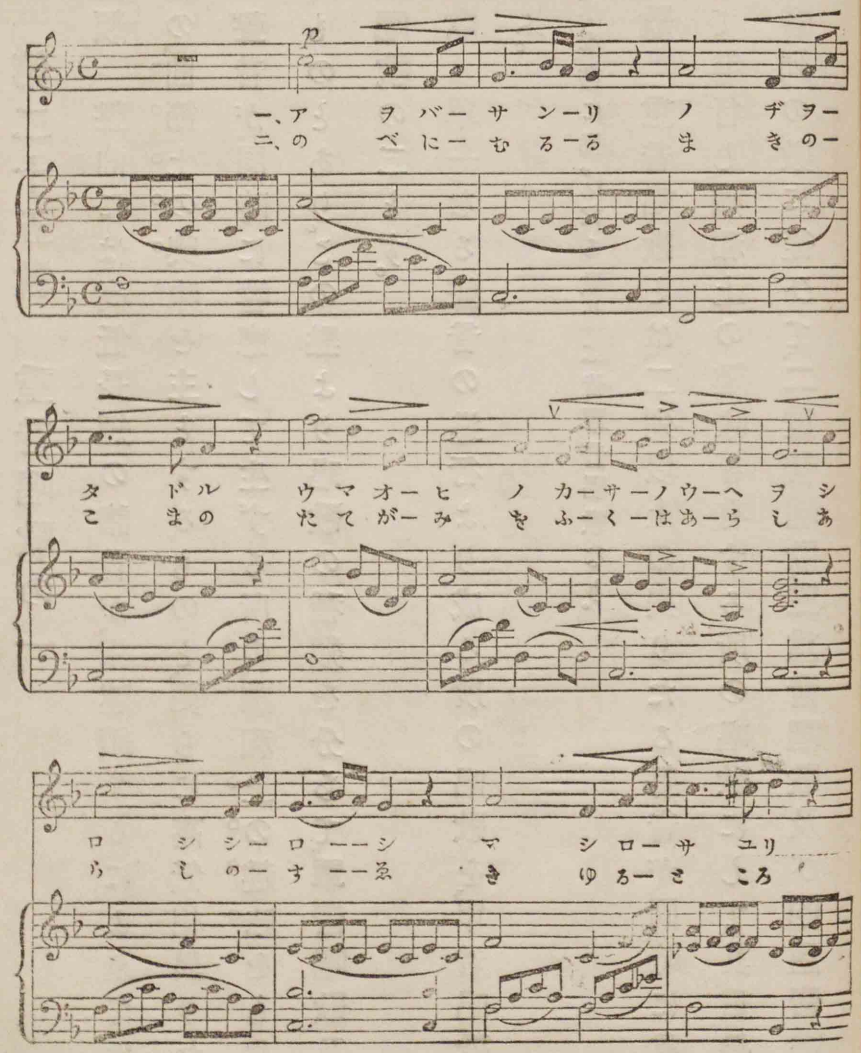


殖民の歌(つゞき)

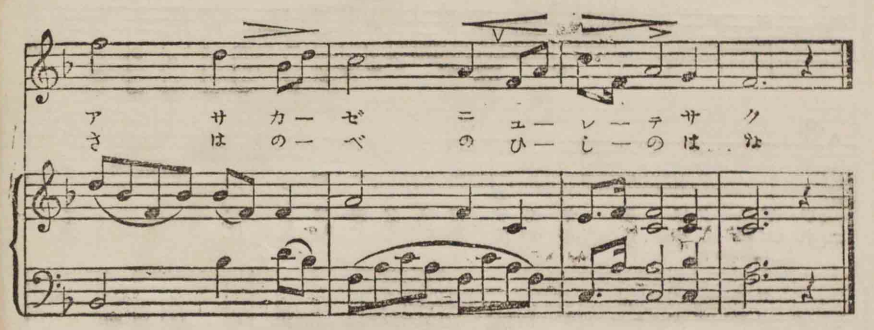


夏　　野

〔設問〕一、轉位强聲とは如何。
二、當曲中に於ける轉位强聲を指摘せよ。



夏　　野(つゞき)



夏　野

一、青葉三里　野路を辿る、
馬追ひの笠の上を、
白し白し眞白小百合
朝風にゆれて吹く。

二、野邊に群るゝ牧の駒の、
鬣を吹くは嵐、
嵐の末消ゆるところ、
澤の邊の菱の花。

第二十五敎　重音唱歌の一

唱歌の種類　聲曲には、高低長短の諸音が、相連續するによりて生ずる所の、曲節上の興味を主とするものと、更らに高低相異りたる所の聲音が、同時に響應して生ずる所の、調和上の趣味をも共有するものとあり。この點より唱歌の種類を分ちて、**單音唱歌**及び**重音唱歌**の二とす。

單音唱歌　單一なる聲音の進行より成る所の唱歌を、單音唱歌と云ふ。

從來本書に掲げたる歌曲は皆單音唱歌なり。

重音唱歌　重音唱歌とは、二列以上の異りたる聲音が、同時に重疊して進行し、調和上の趣味を有する所の唱歌にして、其重疊せる音列の數に從ひて、二重音唱歌、三重音唱歌及び四重音唱歌等の稱あり。

輪唱歌　單音唱歌及び重音唱歌の他に、なほ輪唱歌と稱するものあり。卽ち單音唱歌を、二組又は三組等に分たれたる唱歌者を以て、一定の小節を距てつゝ、追次に合唱反覆し、其結果恰も重音唱歌の如き調和を生ずる所のものこれなり。

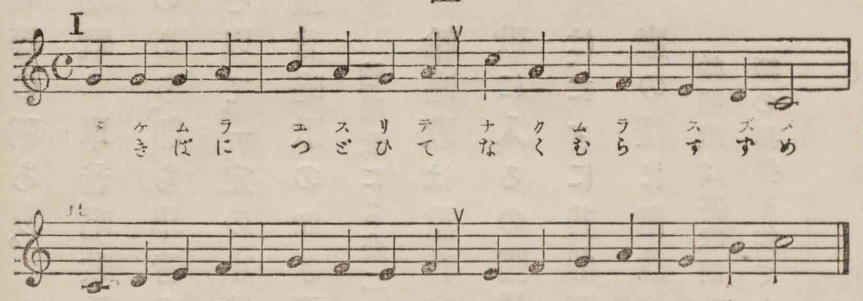
輪唱歌にも亦二部輪唱歌、三部輪唱歌、四部輪唱歌等の別あり。

輪唱歌は重音唱歌の始元にして、單音式唱歌より、重音式唱歌に入るの階梯となるものなり。されば之を學ぶに際しては、たゞに其曲節上の修練のみに止まらず、又よく其聲音響應の樣に留意し、調和上の趣味を會得せん事を要す。

輪唱歌は、其歌詞の長さ(章數)に係らず、適度に之を反覆輪唱し、(通常三四回)敎師の指揮を俟て之を罷むるを常とす。

二部輪唱歌

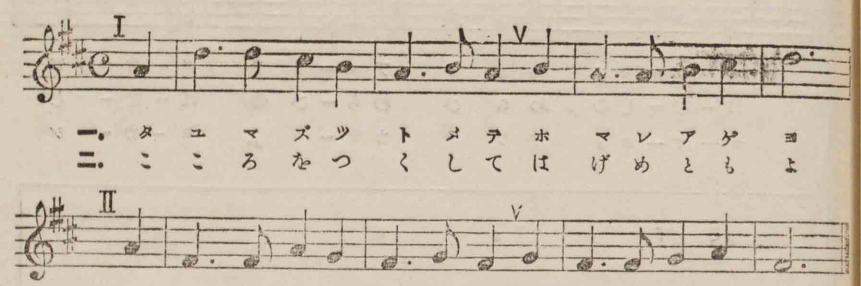
雀



一、竹村ゆすりて
　鳴くむらすゞめ、
　嬉しきふしをや
　げにうたふらむ。

二、のきばにつどひて
　鳴くむらすゞめ、
　めでたき御代をば
　千代々々々々と。

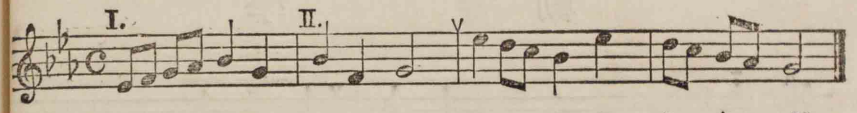
勸　學



一、たゆまず勸めて
　譽(ほまれ)擧げよ、
　御國の御爲ぞ
　いざいそしめ。

二、こゝろを盡して
　勵め友よ、
　御國の御爲ぞ
　いざいそしめ。

蚊遣火



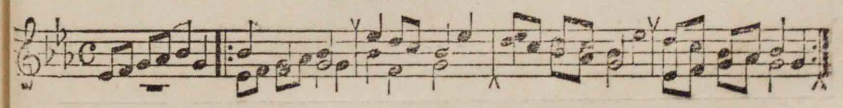
蚊遣火

ま垣のそとに　餘りて高し。

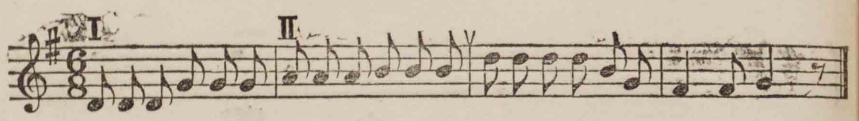
はなしの笑　わらひの話。

聲より更に　蚊遣は高し。

譜用器樂「蚊遣火」



樂しの世



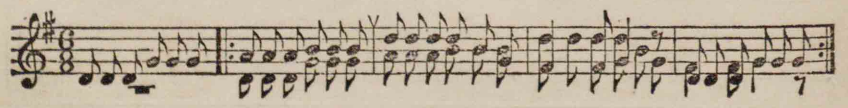
樂しの世

一、花はゑみて　鳥はうたふ、
　　あはれ　樂しの世や。

二、月は照りて　露はみだる、
　　あはれ　樂しの世や。

三、春もたのし　秋もたのし、
　　あはれ　樂しの世や。

譜用器樂「樂しの世」

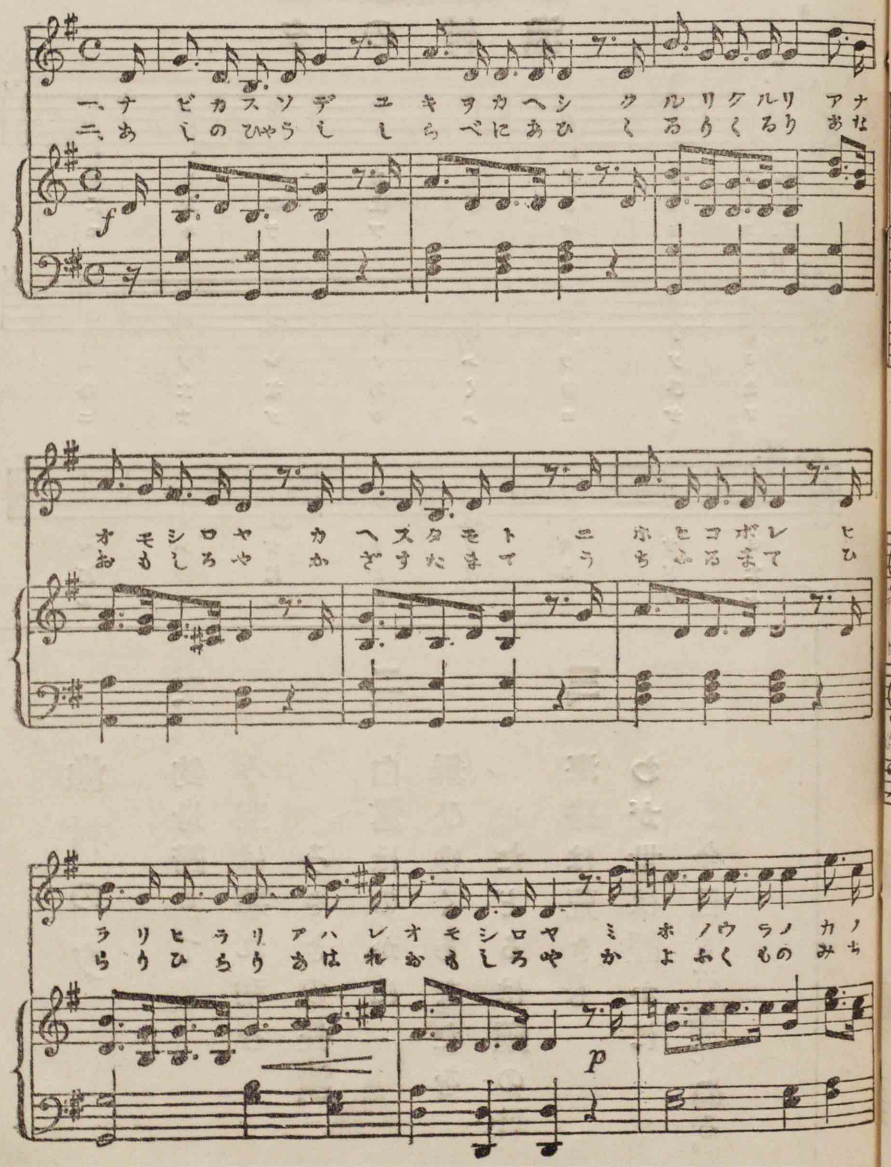


舞踏

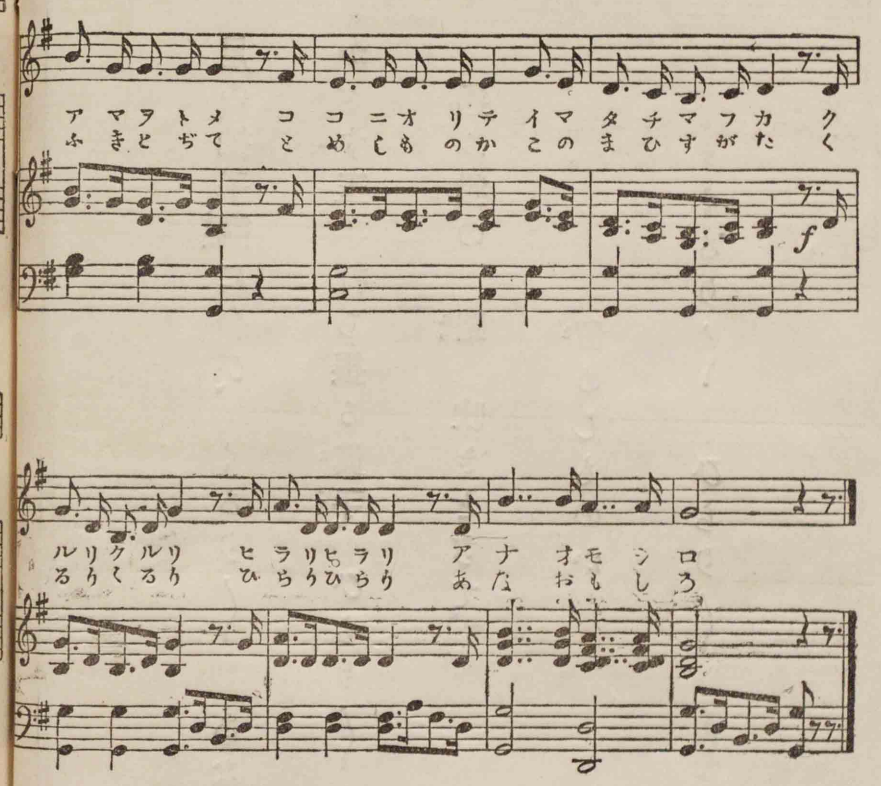
一、靡かす袖雪を廻し、くるり〳〵あな面白や、
かへす袂匂ひこぼれ、ひらり〳〵あはれ面白や、
三保の浦のかの天少女、
こゝに下りて　今立ち舞ふか、
くるり〳〵　ひらり〳〵　あなおもしろ

二、足の拍子調に合ひ、くるり〳〵　あな面白や、
かざす玉手、打ち振る眞手、ひらり〳〵あはれ面白や、
通ふ雲の　路　吹きとぢて、
留めしものか　、
くるり〳〵　ひらり〳〵　あなおもしろ

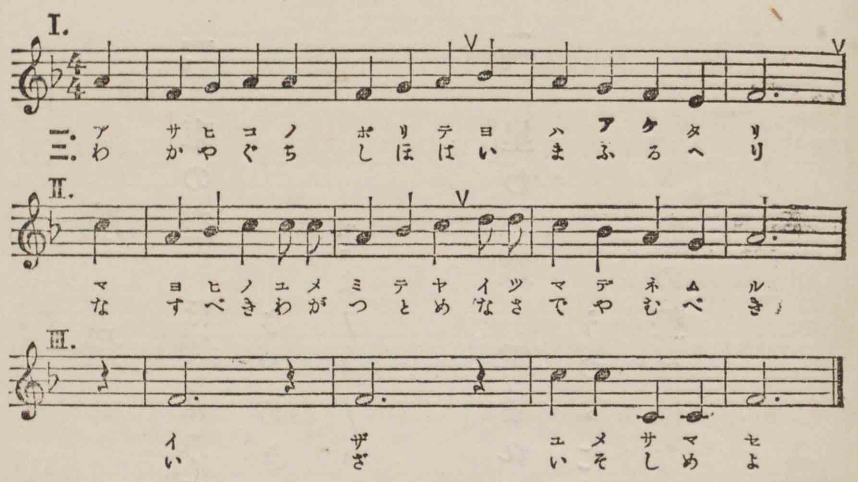
舞　踏


一、ナ　ビカスソデ　ユ　キヲカヘシ　ク　ルリクルリ　アナ
二、あ　しのひやう　し　しらべにあひ　く　るりくるり　あな
オモシロヤ　カ　ヘスタモト　ニ　ホヒコボレ　ヒ
おもしろや　か　ぞすたまて　う　ちふるまて　ひ
ラリヒラリアハレオモシロヤ　ミ　ホノウラノ　カノ
らりひらりあはれおもしろや　か　よふくもの　みち

舞　踏（つゞき）


アマヲトメ　コ　コニオリテイマタチマフカ　ク
ふきとぢて　と　めしものかこのまひすがた　く
ルリクルリ　ヒラリヒラリ　ア　ナ　オモシ　ロ
るりくるり　ひらりひらり　あ　な　おもし　ろ

自　戒



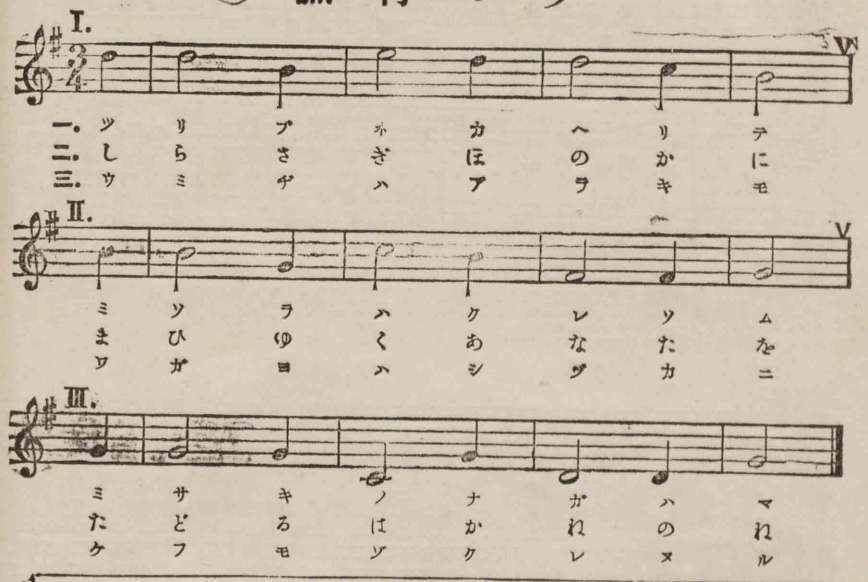
自　戒

一、旭子昇りて
夜はあけたり、
迷ひの夢見てや
いつまで眠むる、
いざ夢醒せ。

二、若やぐ血汐は
今奮へり、
爲すべきわが務め
成さで止むへき、
いざいそしめよ。

三部輪唱歌

◎漁村の夕



漁村の夕

一、釣舟歸りて
み空は暮れ初む
みさきの長濱。

二、白鷺ほのかに
舞ひゆくあなたを
たどるは鐘の音。

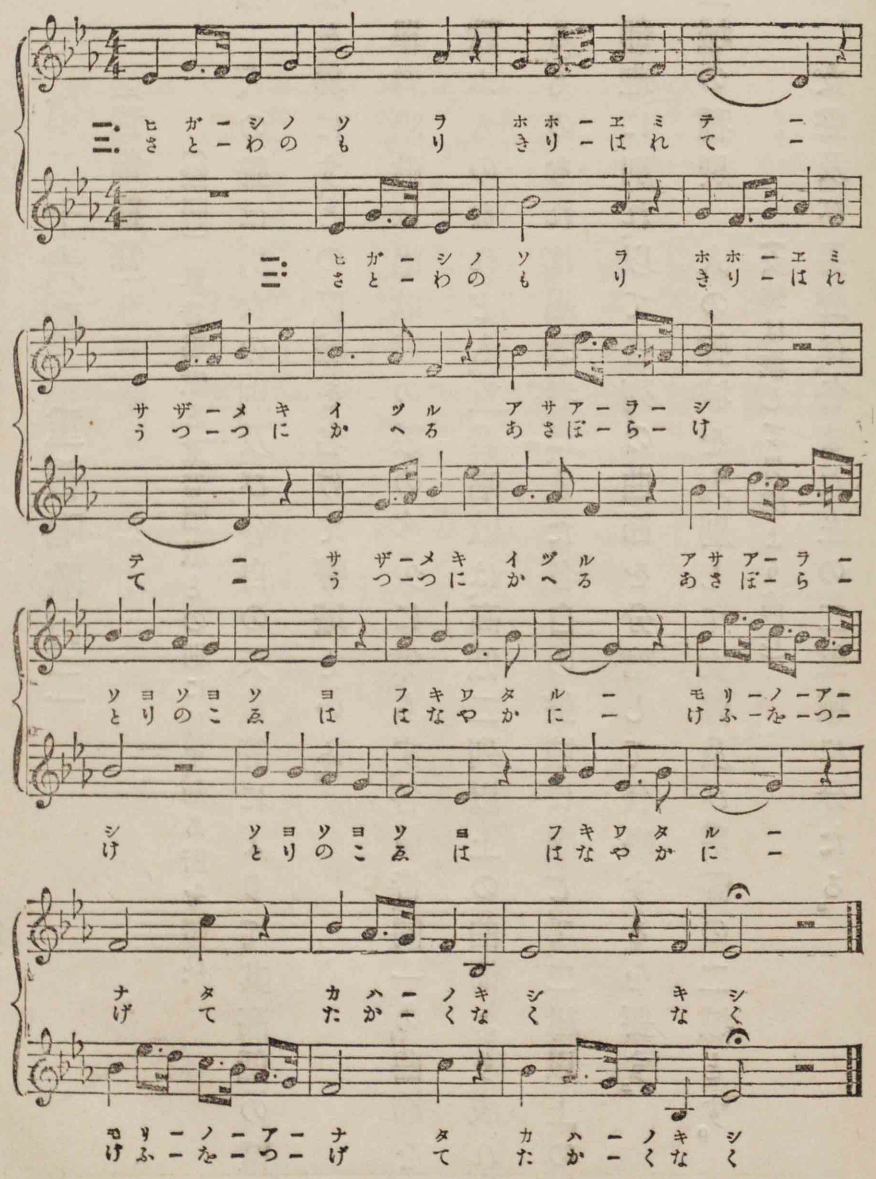
三、海路は荒きも
わが世は靜かに
今日もぞ暮れぬる。

曉景

一、東の空　ほゝゑみて、
　　さゞめき出づる　朝あらし、
　　そよ〳〵　吹き渡る、森のあなた、
　　川のきし。

二、里わの森　霧晴れて、
　　うつゝにかへる　朝ぼらけ、
　　鶏の聲ははなやかに、今日を告げて、
　　高く鳴く。

曉景



第二十六敎　重音唱歌の二

〔豫備箇條〕

〔設問〕單音唱歌と重音唱歌との別に付て、知る所を語れ。

聲域　人の聲は、男女の別、及び各自の天資等によりて、其高低の區域を異にす。この區域を名けて**聲域**といふ。

單音唱歌は、唱歌者の數の多少に係らず、各員皆、同一の曲節を歌ふものなれども、重音唱歌は、高低二列以上の曲節より成れるものなれば、唱歌者は、また各自の聲域に應じて、二組以上の部班に別れ、以て各列の曲節を分擔して合唱するを要す。

聲域の種別　人の聲域を大別して、女聲及び男聲の二域とす。

（女聲は概して男聲より高し）

女聲及び男聲は、各また左の二聲域に分たる。

- 女聲
  - 女子高聲（Soprano.）
  - 女子低聲（Contralto 又ハ Alto）
- 男聲
  - 男子高聲（Tenor）
  - 男子低聲（Bass）

小兒の聲は、男兒女兒共に女聲域に屬す。（但し其區域は通常成女より狹し）

男聲のみ、若くは女聲のみを以て合唱する所の重音唱歌を、**單性重音唱歌**と云ひ、男女兩聲を以て合唱する所の重音唱歌を、**復性重音唱歌**と云ふ。

單性二重音唱歌は、多く女子高聲と女子低聲との合唱、若くは、男子高聲と男子低聲との合唱に成る。（第四十九頁以下の二重音唱歌は皆これなり。）

單性三重音唱歌を行ふには、男聲或は女聲を、各々左の三聲域に分つものとす。

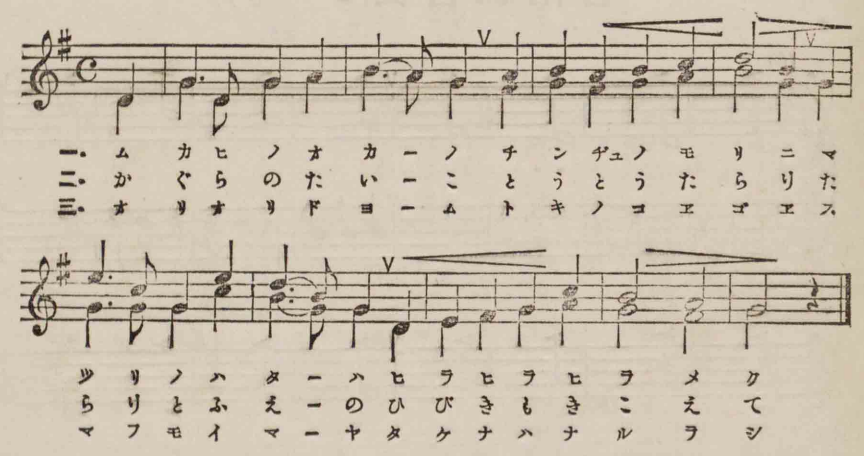
- 女聲
  - 女子高聲（Soprano）
  - 女子中聲（Mezzo-Soprano）
  - 女子低聲（Alto）

男聲
- 男子高聲 (Tenor)
- 男子中聲 (Baritone)
- 男子低聲 (Bass)

注意

世人動もすれば、高聲をのみ重んじて、低聲を輕んずるの傾きあるが如し、然れども人の聲域は、固これ各自の天賦にして、高聲低聲各々其特質本領あり、共に音樂上要用にして、何れを優り何れを劣ると爲すべきにあらず、殊に重音式唱歌は、高低諸部の音聲が、相和し相應じて、始めて其趣味を發揮するものなれば、唱歌者は低聲域に屬すると、高聲域に屬するとに係らず、各々よく其分擔する所の部分に練熟すると同時に、諸部の聲音相響應して生ずる所の、調和上の結果に意を注ぎ、相俟て以て完全なる全部を集成せん事を期すべし。

村祭



村祭

一、向ひの岡の鎭守の森に、
祭の旗はひら〳〵ひらめく。

二、神樂の太鼓とう〳〵たらり、
たらりと笛の響も聞えて。

三、折り〳〵どよむ鬨の聲々、
相樸も今や酣なるらし。

音階練習曲

(1)

(2)

(3)

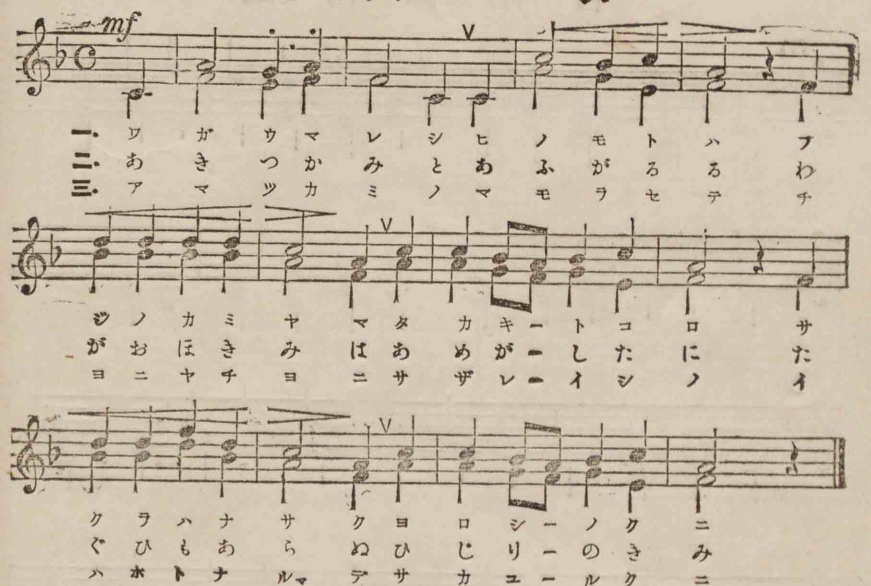
音階練習曲(つゞき)

(4)

(5)

(6)

愛國の歌



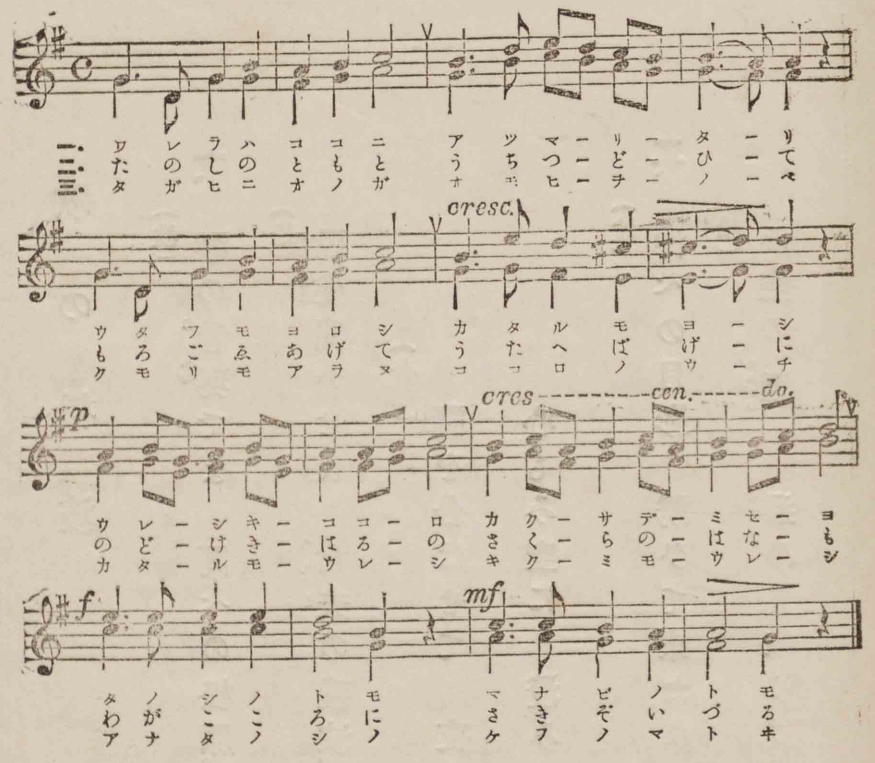
愛國の歌

一、わが生れし日の本は、
富士の神山高きところ、
櫻はなさくよろしの國。

二、現つ神と仰がるゝ、
わが大君は天が下に、
たぐひもあらぬ聖の君。

三、天つ神の護らせて、
千代に八千代にさゞれ石の、
巖となるまで榮ゆる國。

友のつどひ



友のつどひ

一、吾等は　こゝに集まりたり、
歌ふもよろし　語るもよし、
うれしき心　隱さで見せよ、
親しの友　學びの友。

二、樂しの友と　打ち集ひて、
諸聲あげて　歌へば實に、
のどけき春の　櫻の花も、
わが心に　咲きぞ出づる。

三、たがひに　おのが思ひを述べ、
曇りもあらぬ　心の中、
語るも嬉し　聞く身もうれし、
あな樂しの　今日の團欒。

歌の松波

(波)
一、琴の音奏でよ　岡べの松原。
(松)
歌聲聞かせよ　女夫の磯波。
(合唱)
調を合はせて　夜すがら歌へば、
心もみ空に　澄みゆく夜半かな。

(波)
二、沖べの月影　誘ひて來たれり。
(松)
み空の雁　追ひて來にけり。

(合唱)
三人のうたひに　なみまを躍りて、
舞ひ舞ふ月影　あな〳〵おもしろ。

(波)
三、雁去にけり　夜もはや更けたり。
(松)
つきかげ入りけり　東も白らめり。
(合唱)
翌の夜契りて　今宵を重ねん、
さらばよ磯波　さらばよ松原。

歌の松波

(高聲部)

コおカ　トきリ　ノベガ　ネのネ　カつイ　ナきニ　デかケ　ヨげリ　オさヨ　カそモ　ベひハ　ノてヤ　マきフ　ツーバ　たーれ　ケータ　ラリリ

(低聲部)

歌の松波(つゞき)

シみア　ラたス　ベリノ　チのヨ　アうチ　ハたギ　セひリ　テにテ　ヨなコ　スーガ　みーヒ　ラーウ　なーヒ　ウーお　チーカ　ターどー　サーリ　ヘーリ　ハテン

シみア　ラたス　ベリノ　チのヨ　アうチ　ハたギ　セひリ　テにテ　ヨなコ　スーガ　みーヒ　ラーウ　なーヒ　ウーお　チーカ　ターどー　サーネ　ヘーリ　ハテン

コまサ　コひラ　ロまバ　モふヨ　ミつイ　ソきソ　ラかナ　ニげミ　スあサ　ミなラ　ユあバ　クなヨ　ヨおマ　ハもツ　カーバ　シーバ　ナろラ

コまサ　コひラ　ロまバ　モふヨ　ミつイ　ソきソ　ラかナ　ニげミ　スあサ　ミなラ　ユあバ　クなヨ　ヨおマ　ハもツ　カーバ　シーバ　ナろラ

第二十七教　音程の三

〔豫備箇條〕

〔設問〕短三度音程と、長三度音程との差別如何。

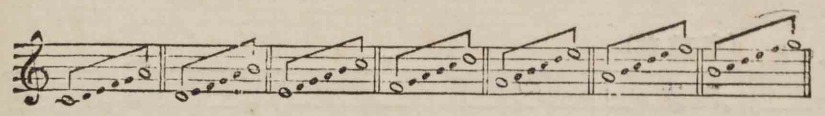
六度音程　甲乙二音間の距離六度に渉るものは、之を六度音程と云ふ。(第五十圖)

長音階中に含む所の六度音程を分ちて、**短六度音程**及び**長六度音程**の二種とす。

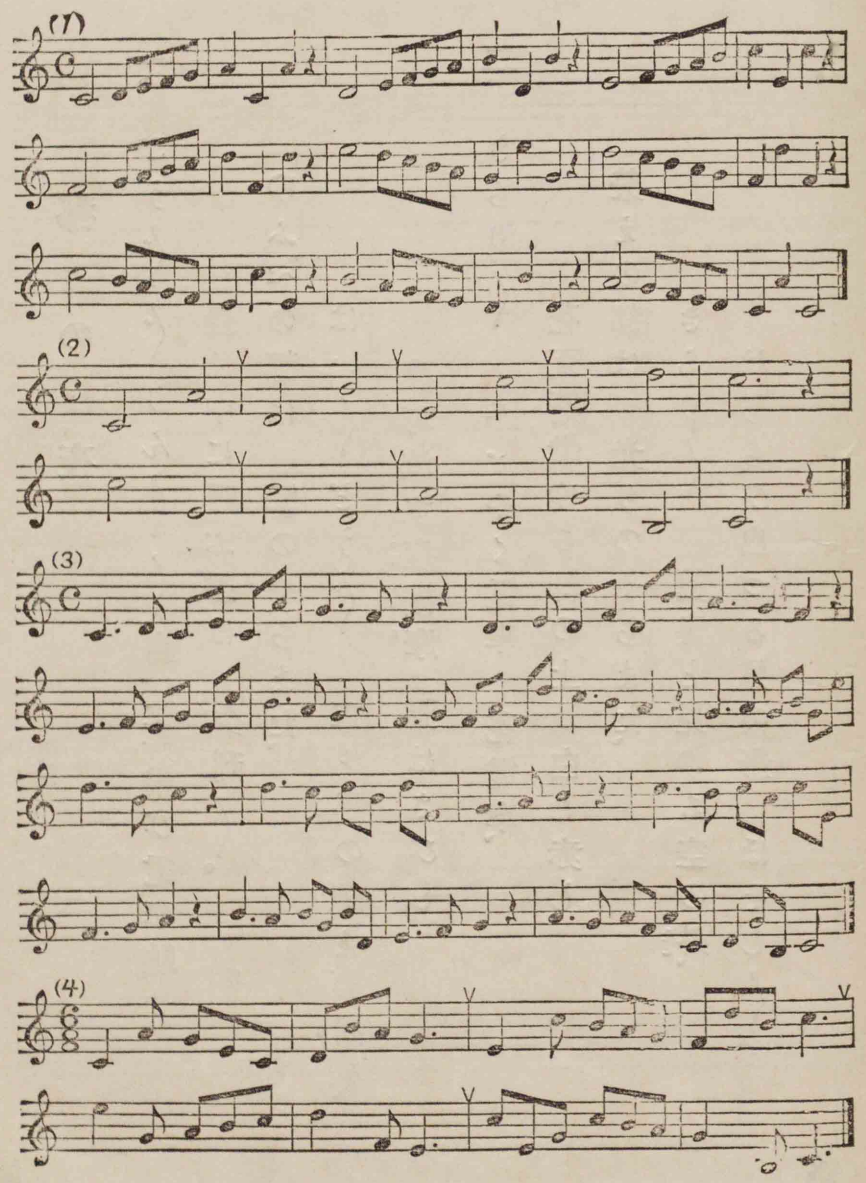
短六度音程は、三個の全音と二個の半音とより成り、長六度音程は、四個の全音と一個の半音とより成る。

〔設問〕上圖に示せる六度音程中、何れが短六度にして、何れが長六度なるかを指摘すべし。

第五十圖



六度音程練習曲

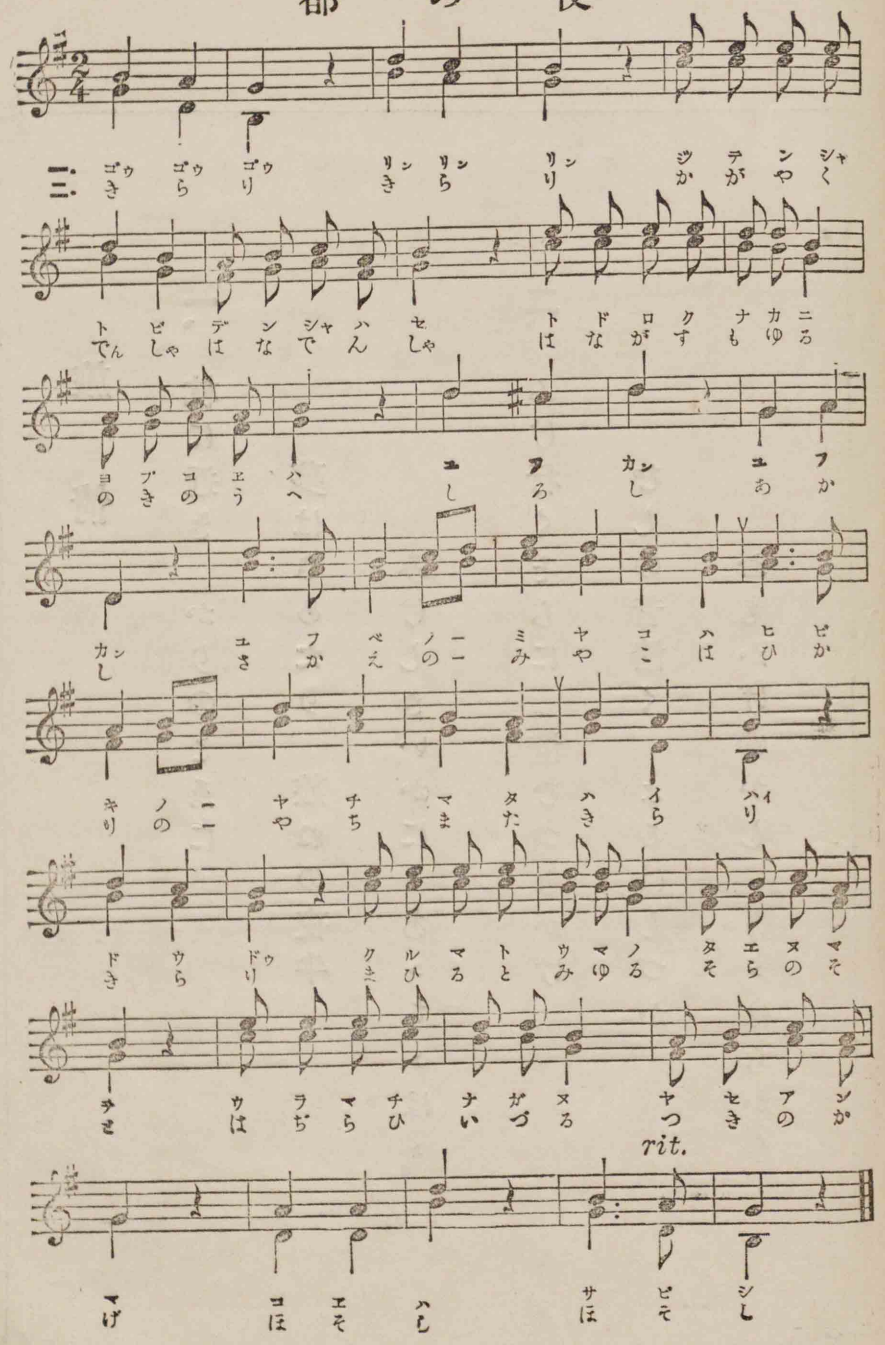


都の夜

一、ごうゞゞりん〳〵〳〵、自轉車飛び電車馳せ、
　轟く中に呼ぶ聲は　夕刊〳〵。
　ゆふべの都は　響のやちまた、
　はい〳〵どうゞ　車と馬の絶えぬ間を、
　裏町流す瘦按摩　聲はさびし。

二、きらり〳〵　かゞやく電車　花電車、
　花瓦斯燃ゆる軒の上　白し赤し。
　榮えの都は　光りのやちまた、
　きらり〳〵　眞晝と見ゆる空の外、
　はぢらひ出づる月の影　ほそし〳〵。

都の夜

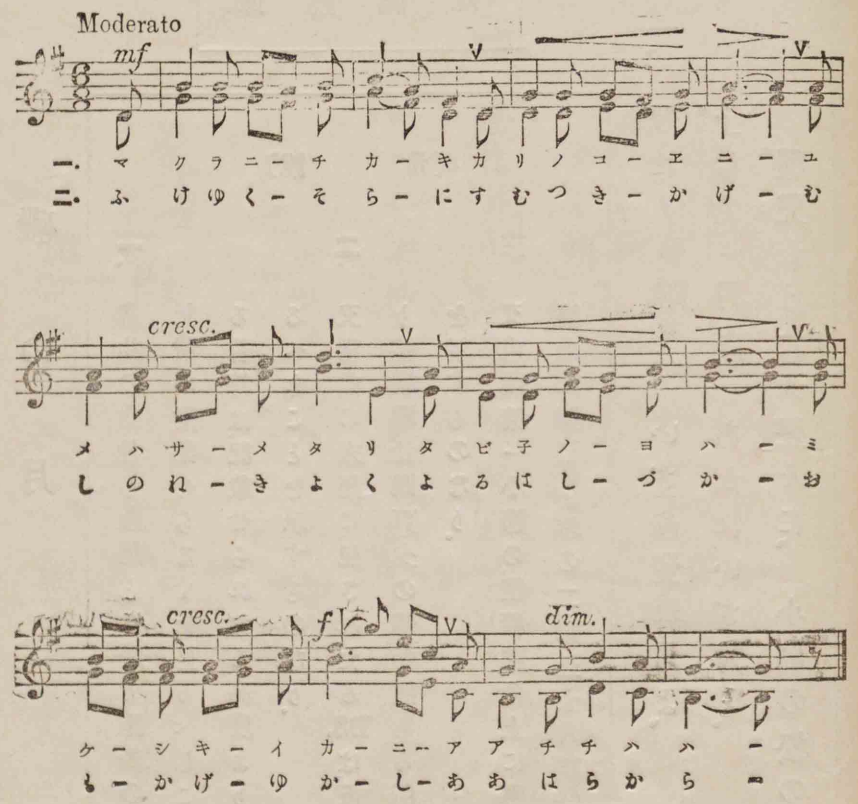


旅　情

一、枕に近き　かりのころに
　　夢はさめたり　旅ねの夜半
　　みけしきいかに　あゝちゝはゝ。

二、ふけ行くそらに　澄むつきかげ
　　むしの音清く　よるはしづか
　　おもかげゆかし　あゝはらから。

旅　情



磯の月

豫備個條

〔說　示〕

一、當曲の曲首と曲尾とに於て、譜表の上に 8va……の記號の附記せらるゝを見るべし。これこの點線の下なる音符は、記載せられたる高度より、八音上にて奏せらるべきことを示すものなり。

二、又當曲の末尾に記されたる DS. は、反標記號とて、其所より接續標廿四頁「夕の鐘」參照)ある所へ、反覆すべきことを示すものなり。

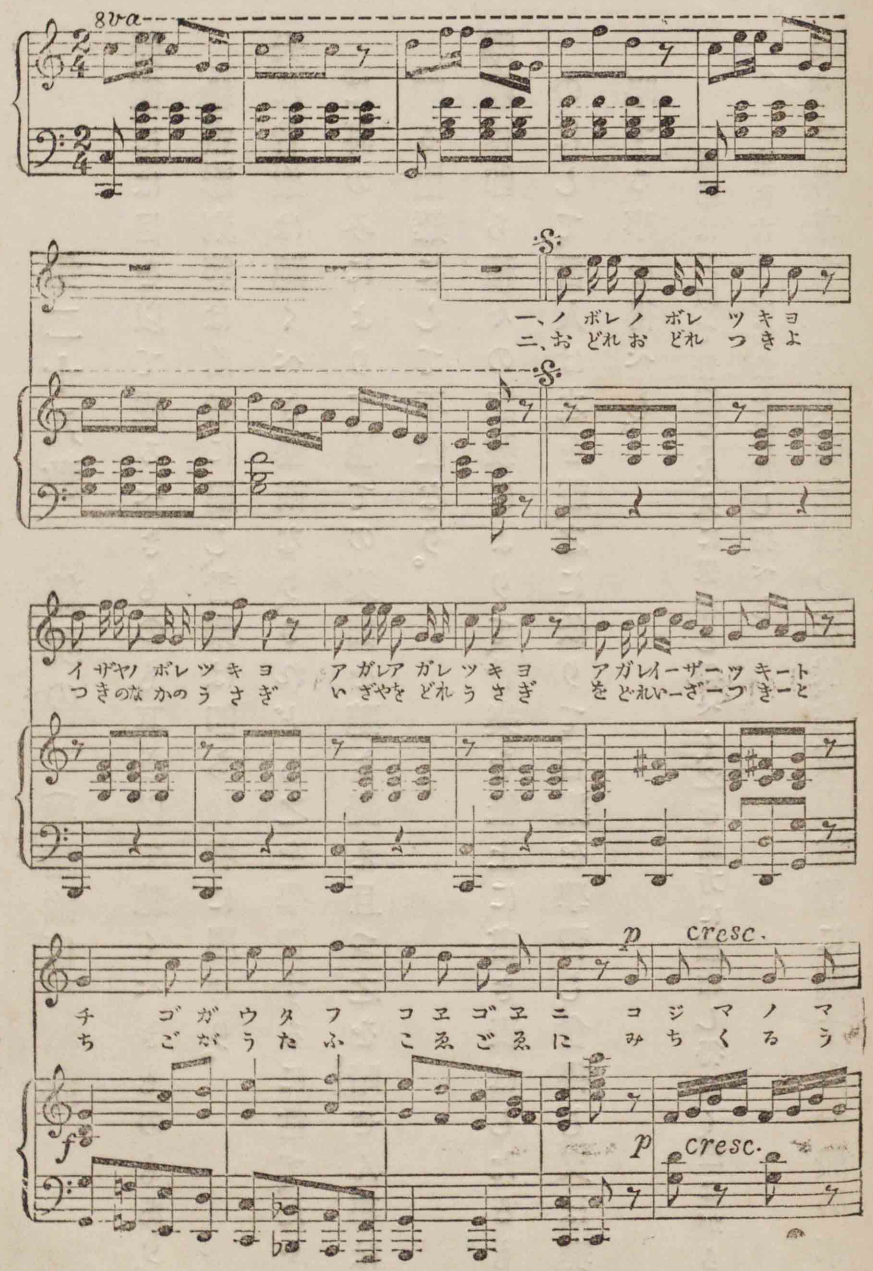
三、又末段第一小節の、復縱線の上に附記せられたる(・は終止記號 Fine(卷の二、第五十八頁既說)と同意義なり。

一、登れ〳〵月よ、いざや登れ月よ、
上れ〳〵月よ、あがれいざ月と、
稚兒がうたふ聲々に、小島の松の下枝のあたり、
ほのめくものぞ見え初むる。
(合唱)
見ゆるややがて　登り出づる大月、
出づるや速く　ひかり四方に漲る。

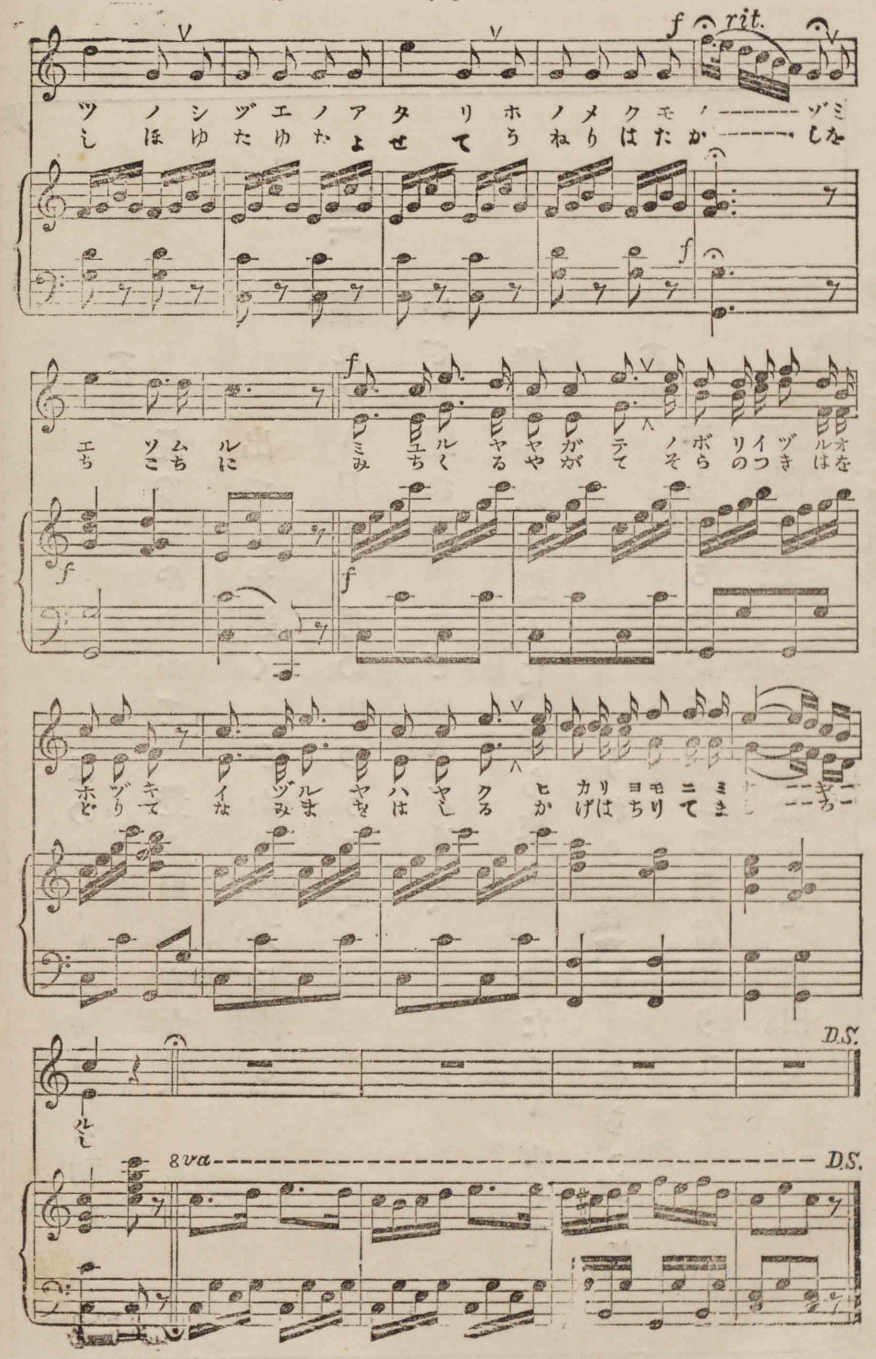
二、躍れ〳〵月よ、月の中のうさぎ、
いざや躍れ兎、をどれいざ月と、
稚兒が歌ふ聲々に、滿ち來る潮、ゆた〳〵寄せて、
(合唱)
滿ち來るやがて　空の月は躍りて、
波間を走る　影はちりて眞白し。

磯の月

〔設問〕當曲は如何に反覆して、何所にて終止すべきか。



磯の月(つゞき)



第二十八教　總說の一（樂譜論復習補說）

美術には目を以て視るべきものも、耳を以て聽くべきものもあり。繪畫彫刻等は前者に屬し、音樂は卽ち後者に屬せり。夫れ音樂は聽くべき藝術なり、されども之を學習するに當て、たゞに耳のみによりて、總ての樂曲を聽き覺え、且つ之を暗ぜん事は頗る困難にして不便なり。

樂譜は卽ち種々の記號によりて、音樂を紙上に書き表はしたるものにして、吾人は之を視、之に依りて、音樂を學習し、會得し、又は奏唱する事を得べし。

樂譜は又以て音樂を永久に保存し得べく、之を諸方に頒布し得べく、座ながら東西古今の名曲を歡賞し得べし。

樂譜を構成する所の、諸記號の形狀、性質、用途等に關する一般の事項を、分解說明するものを**樂譜論**と云ふ。

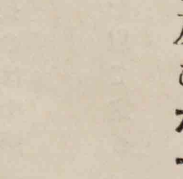
今左に問題を設けて、樂譜の組織に關する事項中、既に學びたる所を總合復習し、竝せて未習の事項を補說すべし。

凡そ音樂は、音の**長短**、**高低**、**强弱**等の性質が、相結合して成れる所のものなれば、樂譜はまた是等の諸性質を、分明に表示するに足るものならざるべからず。

「問題」(一)、音の長短は如何なる記號を以て表はさるゝや。

(二)、音符の種類、形狀及び其歷時の差を說け。

十六分音符より短き歷時を表はすものに、**三十二分音符**及び**六十四分音符**あり。左の如し。



三十二分音符（十六分音符の半長）

六十四分音符（三十二分音符の半長）

音符は、各々一定不變の長さを有するものにはあらず。𝅝と云ひ、𝅗𝅥の一、𝅘𝅥の一等と云ふは、歷時の比例を示せるものにして、之が標準とすべき一拍の長さは、樂曲の性質上、其拍子の緩急によりて等しからず。

樂曲の緩急は、速度標語を以て表はされ、一拍の長さは、拍節機の度數を以て定めらる。

音符の符尾の長さは、譜表上普通二線三間に渉るを例とし、又符尾の方向は、譜表の第三線を中心として、符頭の之より上にあるものは、其符尾を下向きに記し、符頭の之より下にあるものは、符尾を上向きに記すを例とす。されども重音式の樂譜に於て、二刻以上の曲節を、一の譜表上に記載する場合等には、必しも然る能はず(曲譜參照)

二箇以上の音符が、其鈎によりて連結せられたるもの(♫)は唱歌に於ては、主として同一の音韻を、二箇以上の音符に渉りて延く場合に用ゐらるゝを常とす。

全音符と、二分音符の符頭とは、其形相似たれども、之を下の如く區別して記すを正しとす。𝅝 𝅗𝅥 (曲譜參照)

〔問題〕休止符の種類、形狀及び其歷時の差を問ふ。

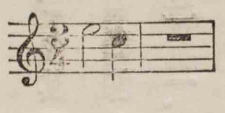
譜表上休止符の位置、全休止符は第四線の下に、二分休止符は第三線の上に、又四分休止符以下は、第二間と第三間とに渉りて記載せらるゝを例とすれども、されまた音符と同じく、重音式の曲譜等に於ては必しも然らず。

全音の歷時に充たざる一小節(例令ば四分の三拍子又は八分の六拍子に於ける小節)の休止に、屢々全休止符を用ゐる事あり。(第五十一圖甲及び百七頁(菅公)の曲譜參照)

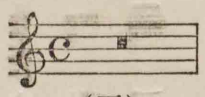
二小節以上の休止には、左圖(乙)(丙)(丁)(戊)の如き休止符を用ゆることあり。また休止符の上に數字を記して、休止すべき小節の數を示すこと、同圖(己)(庚)の如くすることあり。

第五十一圖

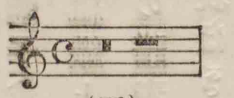
(甲)



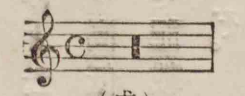
(乙) 二小節の休止



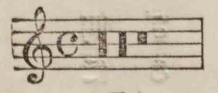
(丙) 三小節の休止



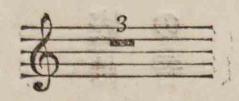
(丁) 四小節の休止



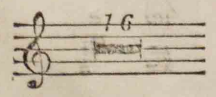
(戊) 十小節の休止



(己) 三小節の休止



(庚) 十六小節の休止



音の高低は、また之を**調子**或は**律**と云ふ。

〔問題〕一、樂譜組織上、音の高低は如何にして表はさるゝや。

二、五線の譜表上に記載し得ざる高低の音は、如何にして表はさるゝぞ。

樂音は、各々其固有の律を表はさんが爲に、一定の名によりて呼稱せらる。音名卽ちこれなり。

〔問題〕一、音名は如何に呼稱せらるゝや。

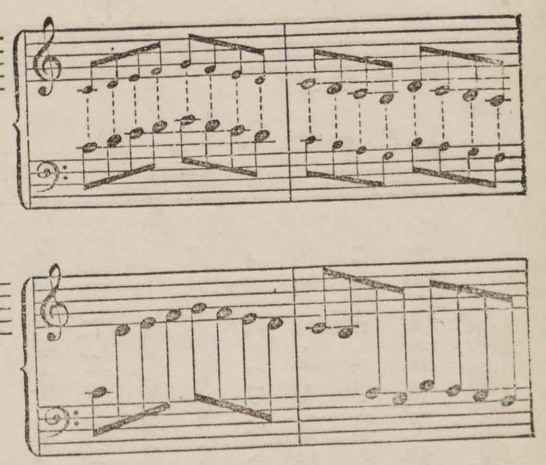
二、同名の音にして、其高度の等しからざるものは、如何にして呼び別けらるゝや。

三、高音部譜表及び低音部譜表上、各音の位置は如何にして定めらるゝや。

四、大譜表上に於ける左の諸音の位置を示せ。

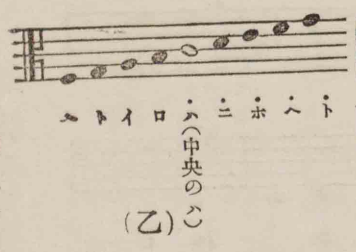
一點**ハ**音、小字**ロ**音、一點**ニ**音、小字**イ**音、一點**ホ**音。

第五十二圖

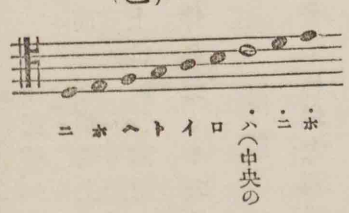


第五十三圖

(甲)



(乙)

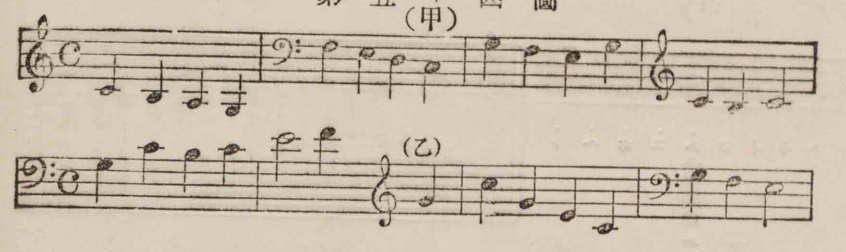


一點**ホ**以上の音を低音部譜表上に記し、又は小字**イ**以下の音を、高音部譜表上に記すには、加線を以て譜表の線に代へ、其線上線間に之を排記す。(第五十二圖甲)

又右の場合に於て、加線によらずして、低音部譜表より高音部譜表に、若くは高音部譜表より低音部譜表に、符尾を延長して之を記すことあり。(第五十二圖乙)

(乙) 高低兩音部譜表の外に、なほ中音部譜表と稱するものあり。譜表の或る線上に中音部記號(又**ハ**字記號ともいふ)と稱するものを附記して、此記號の置かれたる線を以て、中央の**ハ**の位置と定めたるものなり。(第五十三圖)

第五十四圖



ト字記號、ヘ字記號及び八字記號を總稱して音部記號といふ。

高音部譜表上に低音部記號の現はるゝことあり、また低音部譜表上に高音部記號の現はるゝことあり、これ蓋し主として夥多の加線を設くるの煩を避けんが爲なり。(第五十四圖)

〔問題〕 8va……なる記號の效用を問ふ。

8va. は以太利語 Ottava (第八音の義)の略にして、通常この記號が譜表の上部に記さるゝ時は、八音上にて奏すべく、下部にある時は、八音下にて奏すべきを示すものなり。なほ委くは、8va alta (八音高く)又は 8va bassa (八音低く)と記さるゝことあり。

又 Col 8va……(二四頁「夕の鐘」參照)は、點線間の音符を、其第八音と共に奏すべきことを示すものなり。(Col は「共に」の義なり。)

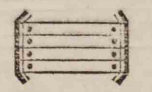
又特に或る音符の上若くは下に、8 の字の附記せらるゝことあり、これまた音符の上に記されたるときは、上第八音と共に、下に記されたる時は、下第八音と共に奏すべきことを示せるなり。

〔問題〕 左の諸記號の效用を問ふ。

反奏點 ‖:　反始記號 D.C.　接續標 𝄋　反標記號 D.S.

終止記號 Fine 又は 𝄐　一番括弧 [I.　二番括弧 [II.

反奏點は二個なることあり、四個なることあり、また其復縱線に、小斜線の添へらるゝことあり、下の如し。



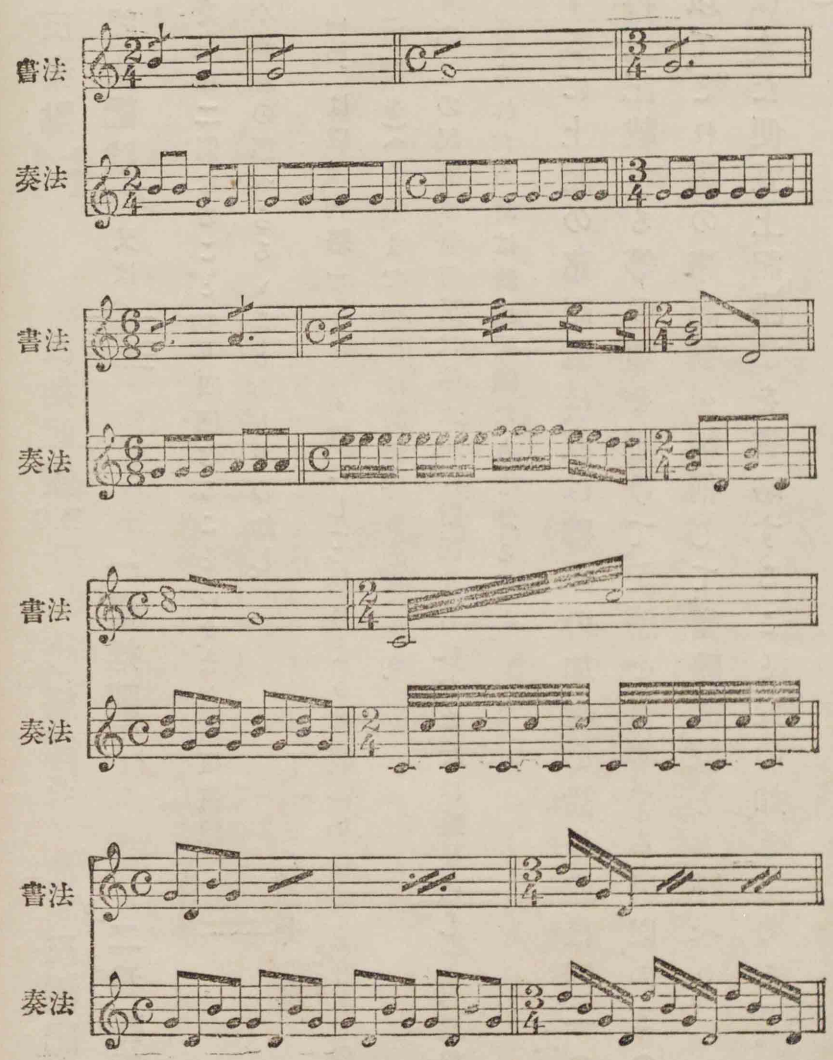
D.C. は以太利語 Da capo. (ダ カポ) 略にして、「始めより」の意。D.S. は Dal Segno (ダル セニョ) の略にて、「標號(𝄋)へ」の意。また Fine (ファーイネ) は同語「終り」の意なり。

(𝄐この記號は、音符又は休止符に附記せられたる時は、延長にして、復縱線に附記せられたる時は、終止記號なりと知るべし。

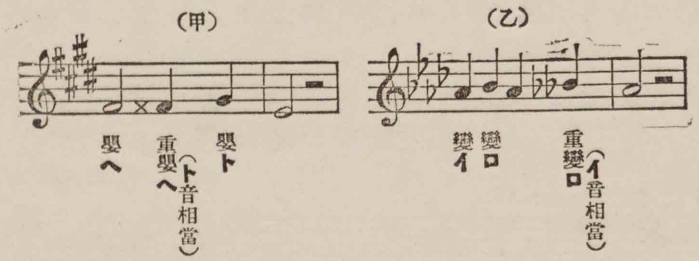
要するに上記の諸記號は、或は夥多の加線を設け、或は同一の曲節を、再三記載する等の煩を避けて、記譜を省略する所以のものなるを以て、これ等の諸記號を總稱して、省略記號とも呼べり。

なほまた便宜上、記譜法を省略すること左の如きものあり。(第五十五圖)

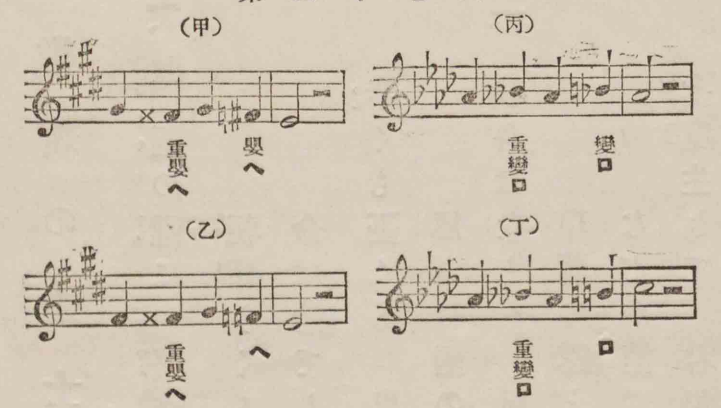
第五十五圖



第五十六圖



第五十七圖



〔問題〕一、嬰及び變の效用を問ふ。

二、本位記號とは如何。

重嬰及び重變、一旦嬰を以て半音上げられたる音を、更らに半音上ぐる場合に用ゐる所の記號を重嬰（×又は𝄪）と云ひ、又一旦變を以て下げられたる音を、更らに半音下ぐる所の記號を、重變（𝄫）と云ふ。（第五十六圖）

重嬰音を嬰音に反へすには、本位記號と嬰記號とを附し、又本位音に反へすには、本位記號二個を附するものとす。（重變に於ても同樣なり）（第五十七圖）

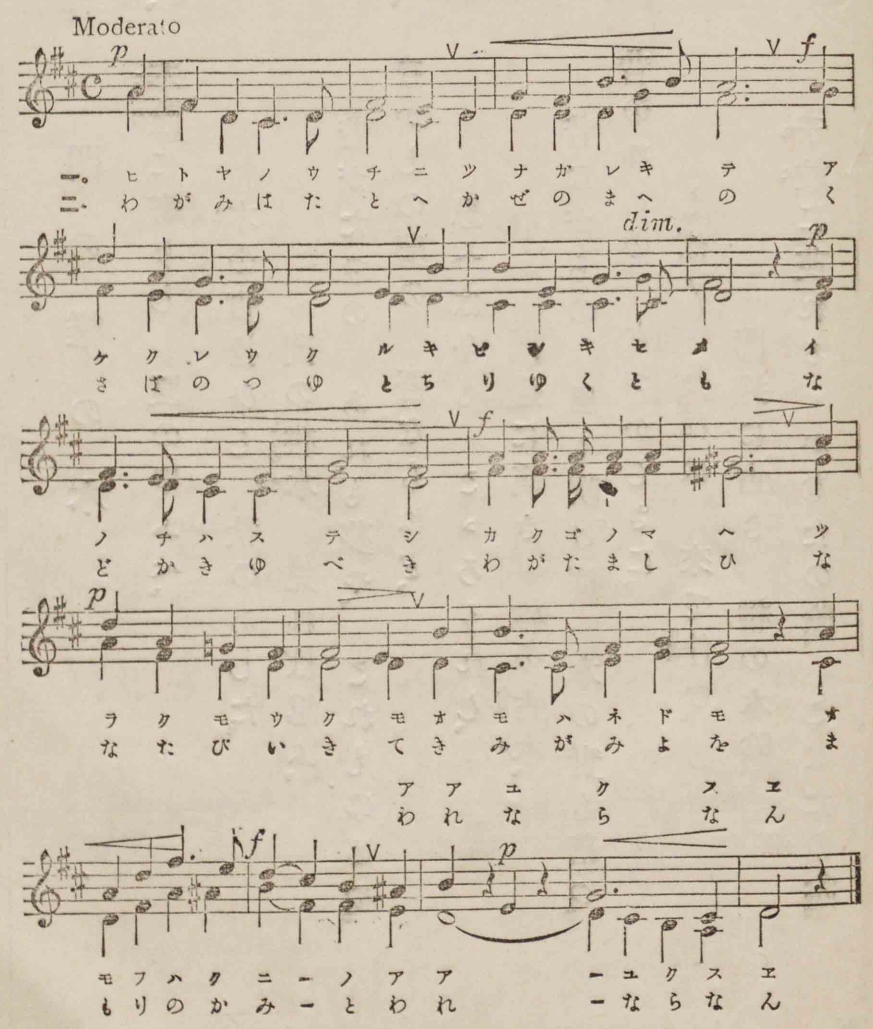
維新の志士

一、固(ひとや)の裡(うち)に　繋(つな)がれ來て、
朝暮(あけくれ)うくる　嚴しき責、
命は捨てし　覺悟の前、
辛(つら)くも憂くも　思はねども、
思ふは國の　あゝゆくすゑ。

二、我身はたとへ　風の前の、
草葉の露と散り行くとも、
などか消ゆべき　わが魂、
七(なな)度(たび)生きて　君が御代を、
護りの神と　われならなん。

維新の志士

〔說示〕當曲譜の第四段第一小節なるト音(本位音)に、本位記號の附きてあるは、其前の小節に嬰ト音あるが故に、注意の爲め記されたるものと知るべし。(第二十九敎轉調の條參照)



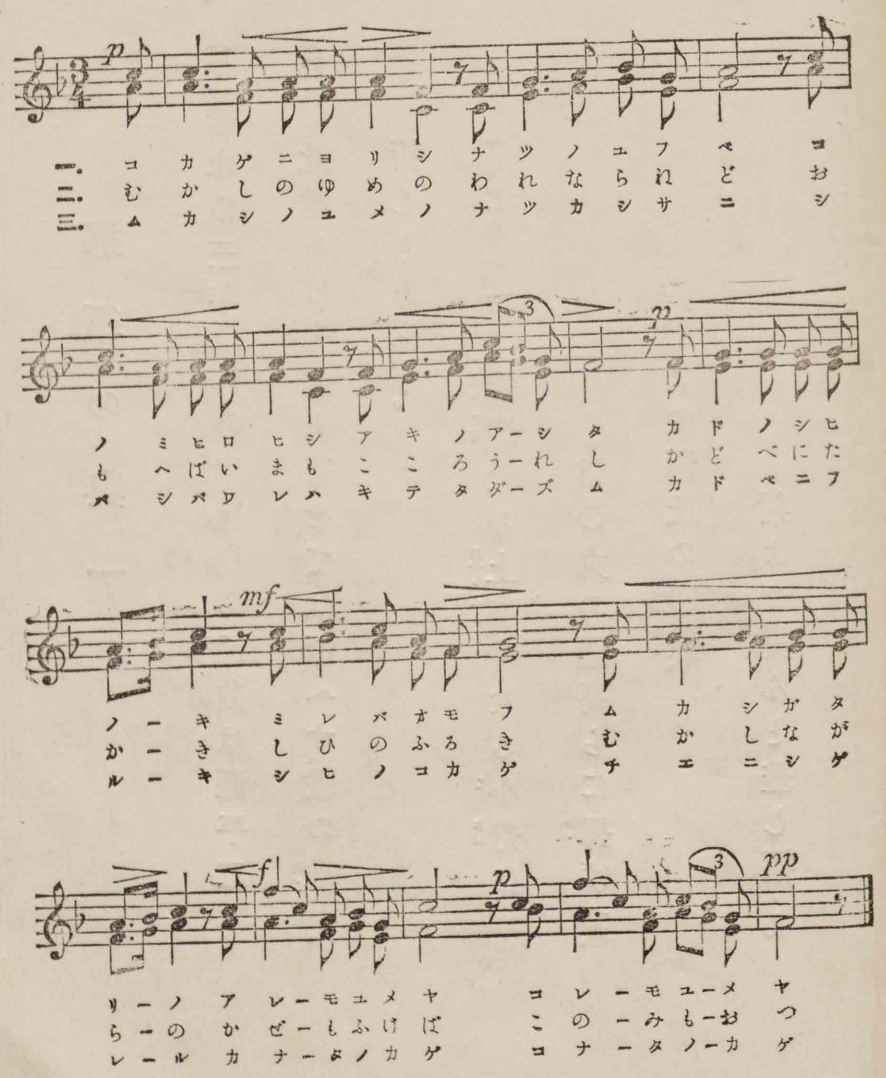
門の椎の木

一、木陰に寄りし　夏のゆふべ、
　木の實拾ひし　秋のあした、
　門の椎木　見れば思ふ、
　昔がたりの　あれも夢や、これもゆめや。

二、むかしの夢の　吾ならねど、
　思へば今も　こゝろうれし、
　門邊に高き　椎の古木、
　昔ながらの　風も吹けば、木の實も落つ。

三、昔のゆめの　なつかしさに、
　しば〳〵われは　來て佇む、
　門邊に古き　椎の木陰、
　千枝に茂れる　かなたの陰、こなたの陰。

門の椎の木



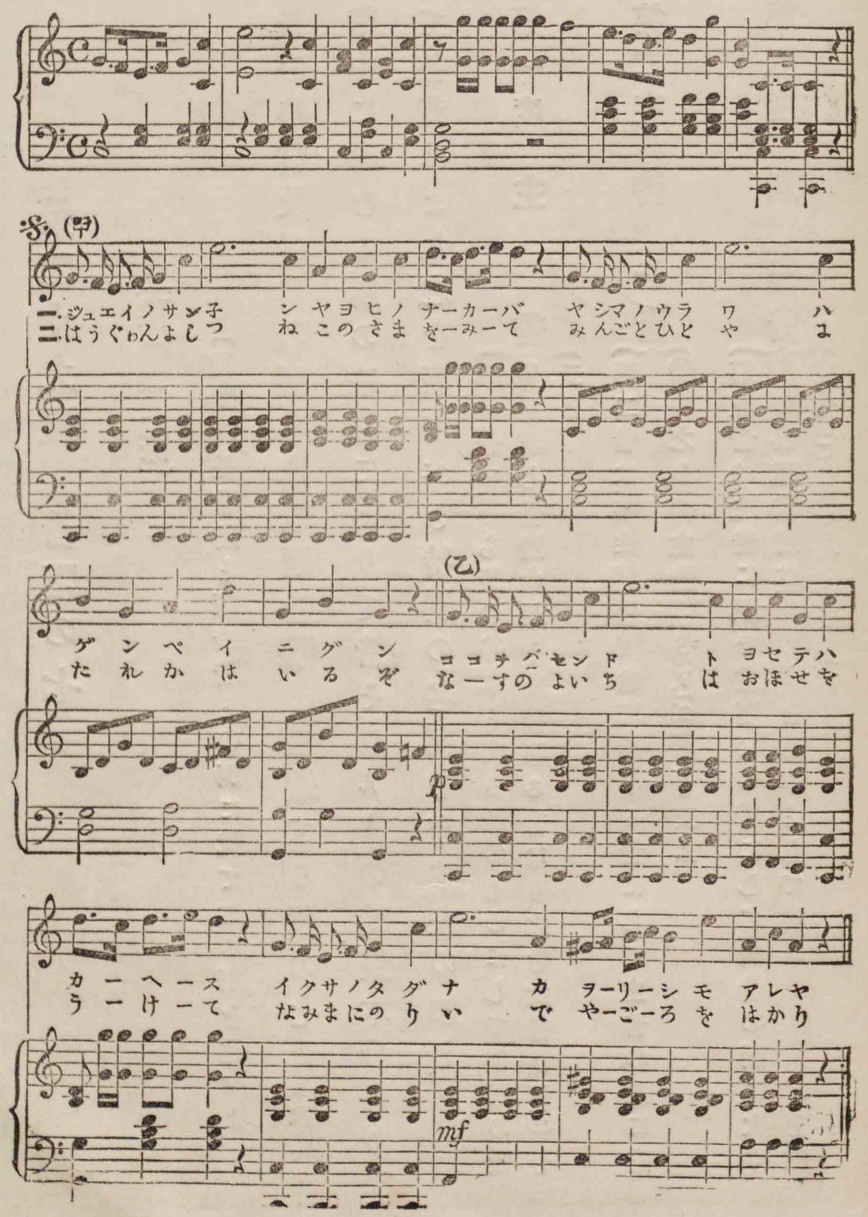
那須の與一

一、（甲）壽永の三年三月の半、屋島の浦曲は源平二軍、
（乙）此處をば先途と寄せては返へす、戰の唯中、
折しもあれや。
（甲乙合唱）　窈窕たる上臈、冲なる小舟に、
日の丸の扇高らに掲げて、
これ射よや源氏の殿原、
射よや見んと差し招く。

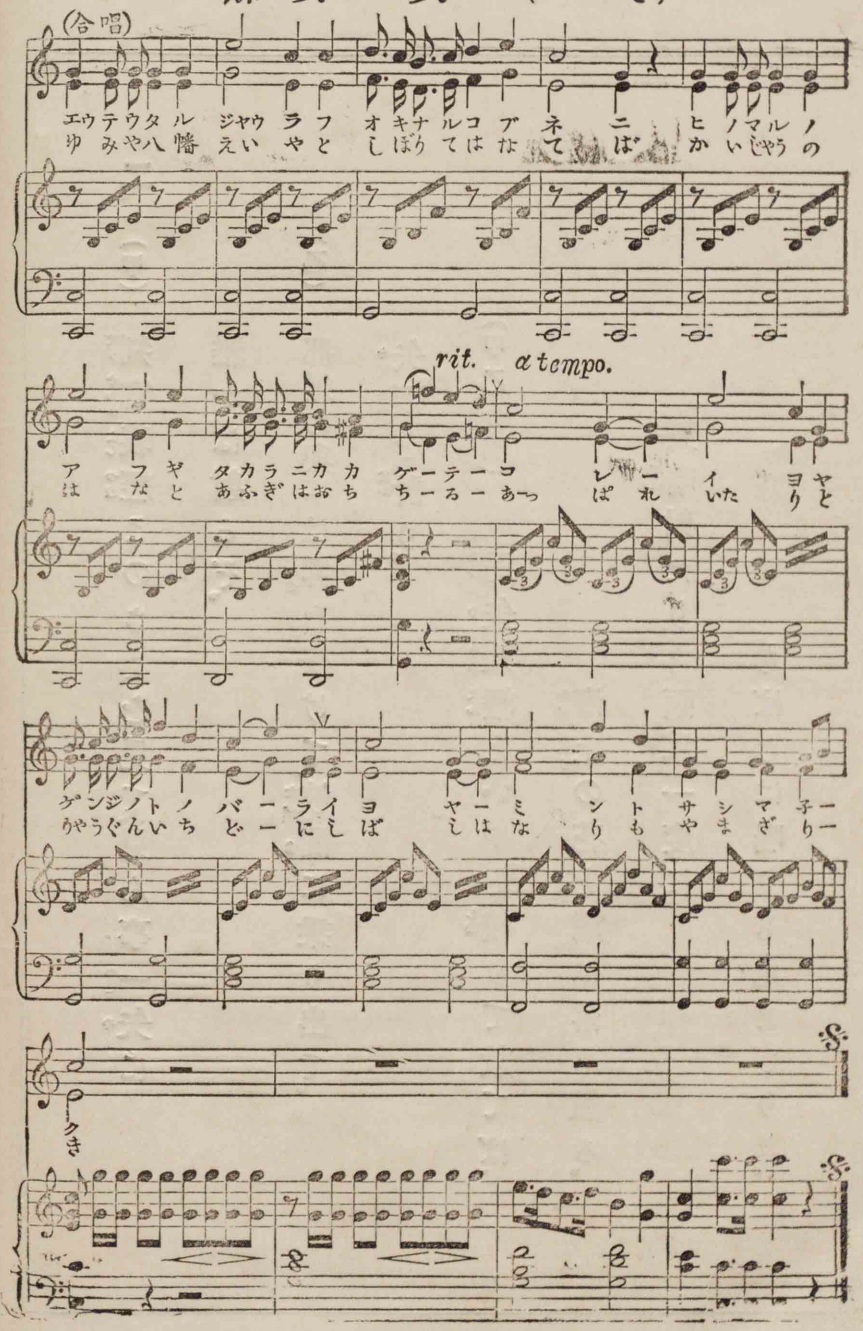
二、（甲）判官義經このさまを見て、見ん事一矢に
誰かは射るぞ、
（乙）那須の與一は仰を受けて、波間に乘り出で、
矢頃を計り。
（甲乙合唱）　弓矢八幡えいやと絞りて放てば、
海上の花と扇は落ち散る、
天晴射たりと兩軍一度に、
しばしは鳴りも止まざりさ。

那須の與一

〔設問〕當樂譜中に於ける記譜省略法を指摘説明せよ.



那須の與一(つゞき)



第二十九敎　音階の七

〔豫備箇條〕

〔設問〕長音階と短音階との別に就て知る所を述べよ。

七音の特質及び其名稱、長短兩音階を組織する所の七音は、其音階中に占むる所の地位によりて、皆それ〴〵の特質本分あり、從て各音はまた之を表すべき特別の名稱を有す。左の如し。

第一度　主音（第一音は、卽ち調の基本と成る所のものにして、强固の性質を有し、音階中最も重要なる音なり。之を主音（Tonic）と云ふ。）

第二度　侍主音（第二音は、其性質比較的輕易なる音にして、主音の上に陪侍す。之を侍主音（Super-Tonic）と云ふ。）

第五度　副主音（第五音は、主音に亞で重要なる音にして、主音の調に次ぐ所の嬰種音階は、此の音を基本として構成せらる之を副主音（Dominant）と云ふ。）

第四度　准副主音（第四音は、主音の下行第五度に當り、主音の調に次ぐ所の變種音階は、この音を基本として構成せらる。之を准副主音（Sub-Dominant）と云ふ。）

第三度　中和音（第三音は、以て音階の長短を區別すべき音にして、主音と副主音との中間に占位し、又頗る重要の音たり。之を中和音（Mediant）と云ふ。）

第六度　准中和音（第六音は、また主音（上の）と准副主音との中間に位する音にして、之を准中和音（Sub-mediant）と云ふ。）

第六音が副主音の上に侍するの性は、恰も侍主音の主音に於けるが如くなるを以て、或は之を侍副主音（Super-Dominant）とも呼ぶ。

第七度　導音（第七音は、主音の半音下に占位し、上行旋律を主音に導引するの性質を有す。之を導音（Leading-tone）と云ふ。）

近世西洋樂の音階に於て、其第七度と第八度との間は、（特に上行の際）常に半音なる事を要するものとす。短音階の第七度を半音上ぐる所以は、蓋しこの導音を形成せんが爲なり。又旋律的短音階に於て、上行の際、其第六度をも半

音上ぐるの理は、その高められたる七度と、六度との間に、曲節の進行上圓滿ならざる、一音半の音程を生ずる事を避けんが爲なり。

靜止音　音階の七個音中、主音、中和音及び副主音の三音は、共に靜止の意義を有し、樂曲の首尾は、通常この三音によりて終始せらるゝを例とす。この點より上記の三音は、又之を**靜止音**と稱ふ。

樂曲の結尾が、主音を以て終るときは、最も完全なる靜止の意義を表はし、副主音は之に次ぎ、中和音はまた之に次ぐ。

關係長短音階は、共に同一の調號を有するを以て、調號のみによりて其長短を區別し難し。故に或る樂曲が、長音階より成れるか、將た短音階より成れるかを識別せんには、其樂曲を成す所の曲節が、長短何れの音階の音列順に從つて、進行するかを考察するを要す。なほ左の二項は、樂曲が長短何れの音階より成れるかを判別する所の、一解式と爲すを得べし。

一、長音階の曲は、通常長音階の靜止音を以て終始し、短音階の曲は、短音階の靜止音を以て終始する事。

特に其結尾は、各其主音を以て終る場合最も多き事。

二、短音階の曲は、其第七度若くは第六度に、屢、變化音の現出する事。

轉調　或る調の樂曲は、主として其調の音階（ト調長音階、ニ調短音階などの義）中の音によりて成るものなりと雖も、又其單調不變なる事を避けんが爲、其進行中、本來の調より他の調に遷轉する事あり。之を**轉調**と云ふ。

主調　一樂曲を構成する所の本來の調を**主調**と云ふ。

附屬調　主調と多數の同音を通有し、之と密接の關係を有する所の調を**附屬調**と云ふ。

各調（音階）は皆六個の附屬調を有す。卽ち「副主音の調」「副主音の調の關係調」「准副主音の調」「准副主音の調の關係調」「主調の關係調」

及び「同主調」これなり。

今ハ調長音階の附屬調を示せば左の如し。

（主調）ハ長音階……附屬調

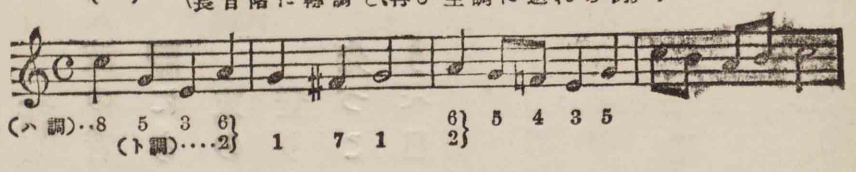
- ト調長音階（副主音の調）
- ヘ調長音階（准副主音の調）
- イ調短音階（關係短音階）
- ホ調短音階（關係短音階の）
- ニ調短音階（ヘ調長音階の）
- ハ調短音階（ハ調長音階の同主短調）

樂曲は何れの調へも轉調する事ありと雖も、通常上記の六個附屬調の中の何れかへ轉ずる場合最も多しとす。（第五十八圖）

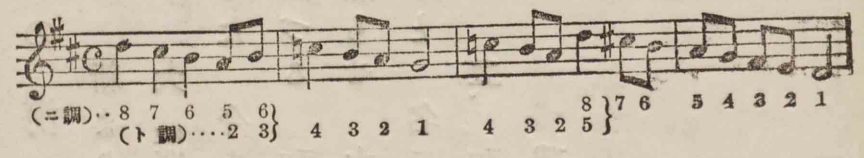
移調　聲域の關係又は演奏上の便宜等より、或る調の樂曲を、他の高きか、または低き調に移して奏唱することあり、之を**移調**といふ。

第五十八圖

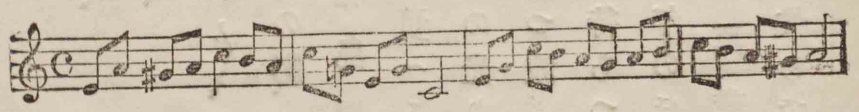
（一）（ハ調長音階より轉調し、其の副主音調に再び返れる例。即ちト調）



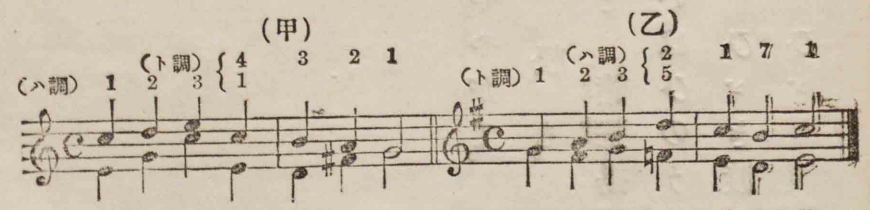
（二）（ニ調長音階より轉調し、其の准副主音調に再び返れる例。即ちト調）



（三）（イ音階短音階より轉調し、關係調即ちハ調長音階に再び主調に返れる例。）



（四）上の諸例に示すが如く、轉調の行はるゝ場合には、多くは變化音の現はるゝものなれども、然かも轉調は必しも高聲部の曲節に變化音を要するものにはあらず。其例一二を示すべし。



變化音はまた轉調の行はるゝ場合以外に、經過音として、曲節の裝飾的意義に於て用ゐらるゝ事あり、此等の差別、及び其他本教に於て說ける所は、和聲編を專びて後、一層明らかに理會し得べし。

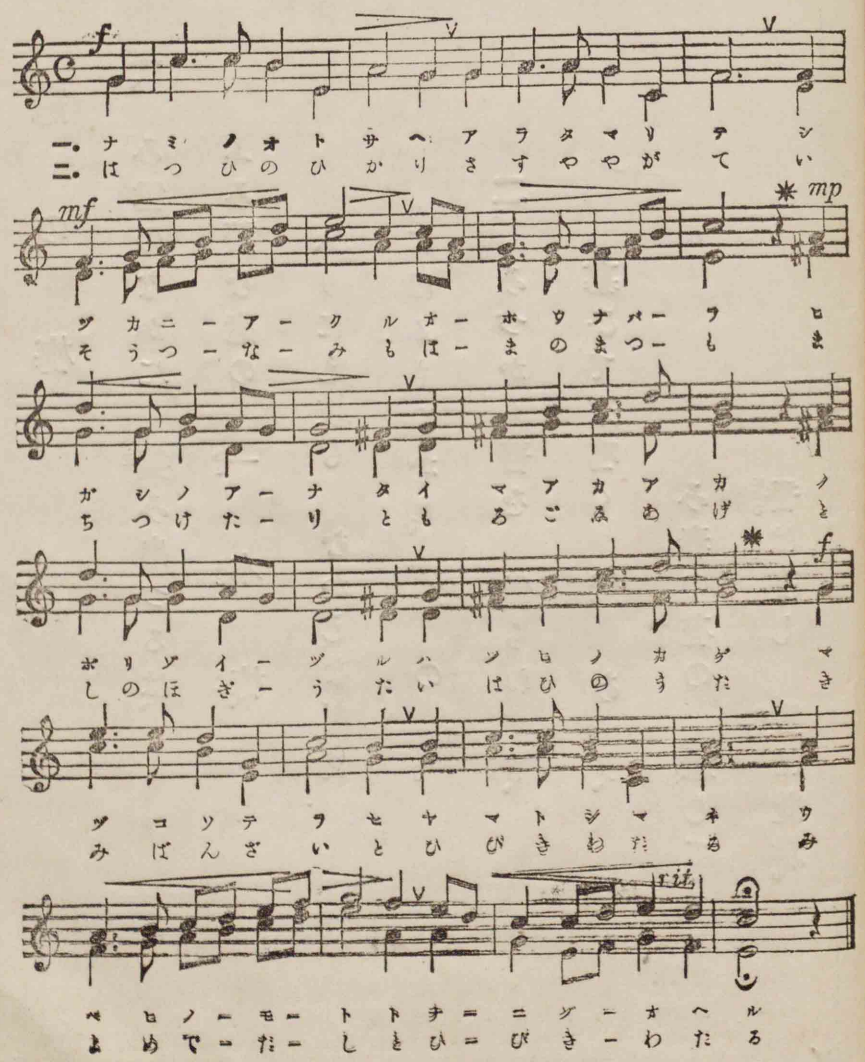
新年の海

一、波の音さへ　新まりて、
靜にあくる　大海原、
東のあなた　今あかく、
登りぞ出づる　初日の影、
先づこそ照らせ　大和島根、
うべ日の本と　名にぞ負へる。

二、初日の光り　さすややかて、
磯打つ波も　濱の松も、
待ちつけたりと　諸聲揚げ、
年のほぎ歌　いはひのうた、
君萬歳と　ひゞき渡る、
御代めでたしと　ひゞき渡る。

新年の海

〔說示〕當曲の主調は**ハ**調長音階なり、然して二個の※標間の小節は、其副主音の調卽ち**ト**調長音階に轉調し居るを視るべし。



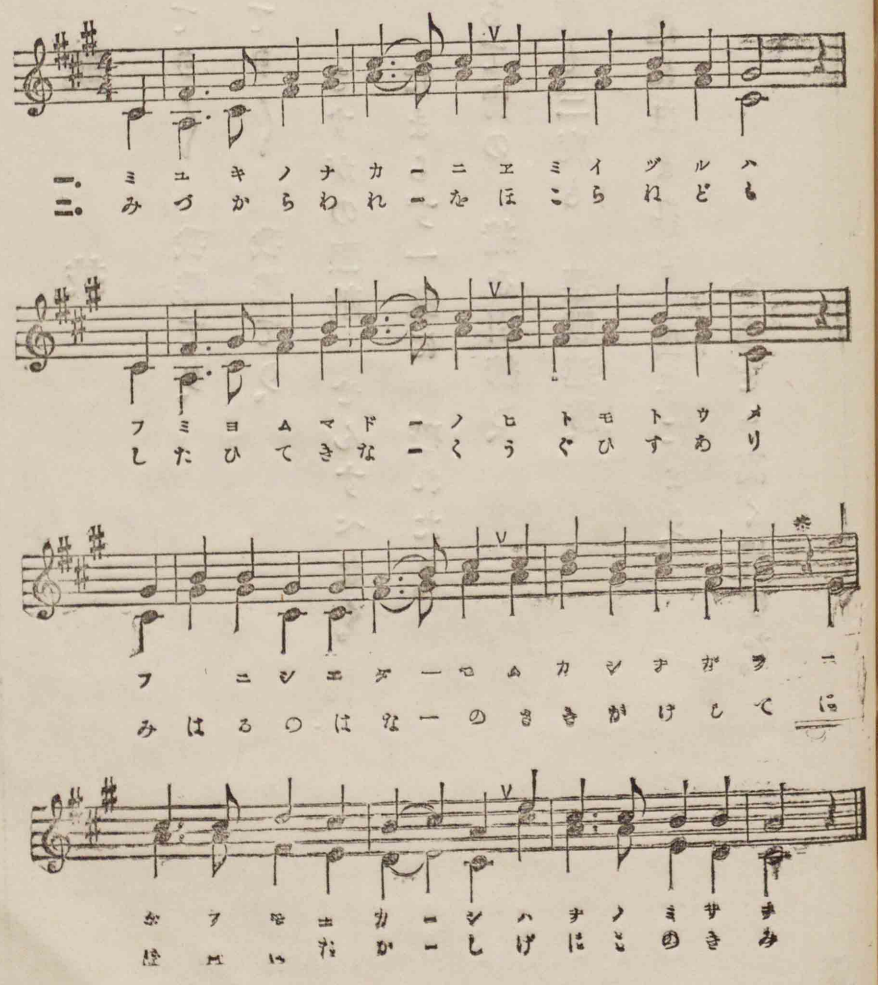
窓の梅

一、み雪のなかに　笑み出づるは、
ふみ讀む窓の　一本　梅、
ふりにし枝も　むかしながら、
にほふもゆかし、花の　操。

二、みづから吾を　傲らねども、
慕ひて來鳴く　鶯　あり、
みづから吾を　傲らねども、
香は高し　實に此君。

窓の梅

〔說示〕當曲は嬰ヘ調短音階を以て始まり、其關係調即ち イ調長音階に轉調して終れり。



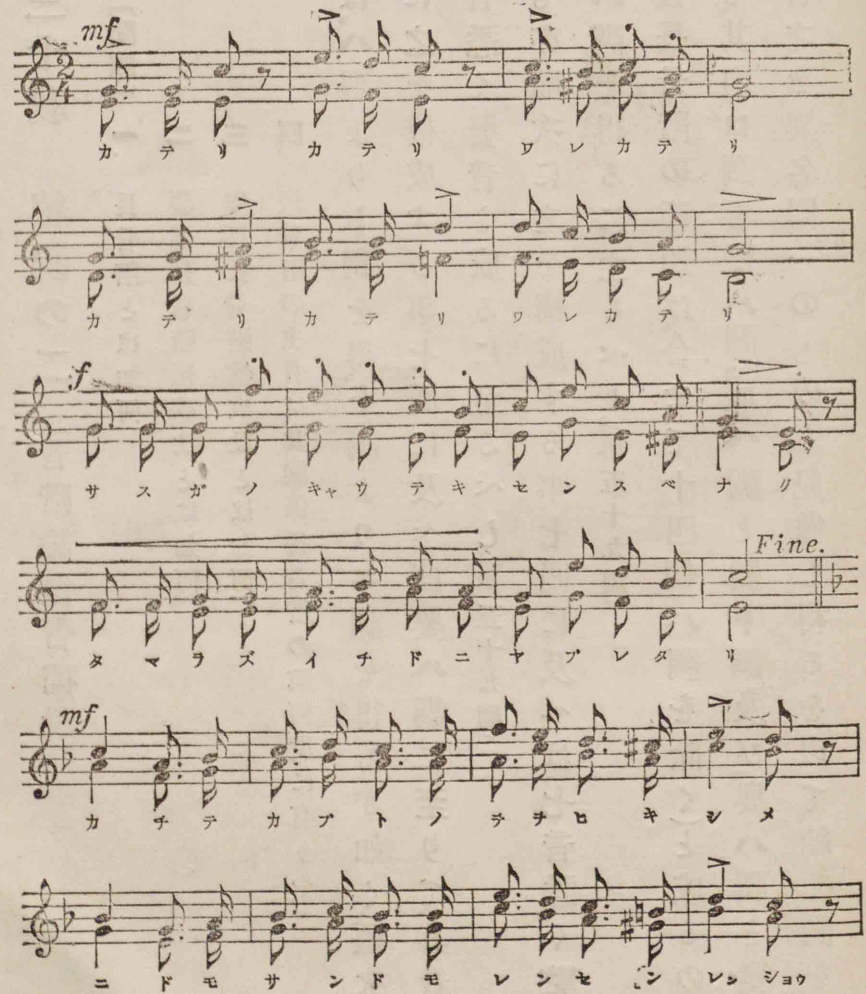
競　技

勝てり〳〵　我勝てり、
勝てり〳〵　我勝てり、
さすがの强敵　せんすべなく、
たまらず一度に　破れたり。
勝ちて冑の　緒を引締め、
二度も三度も　連戰連勝、
遂にほまれを　我手にこり、
かちどき高く揚げむ。

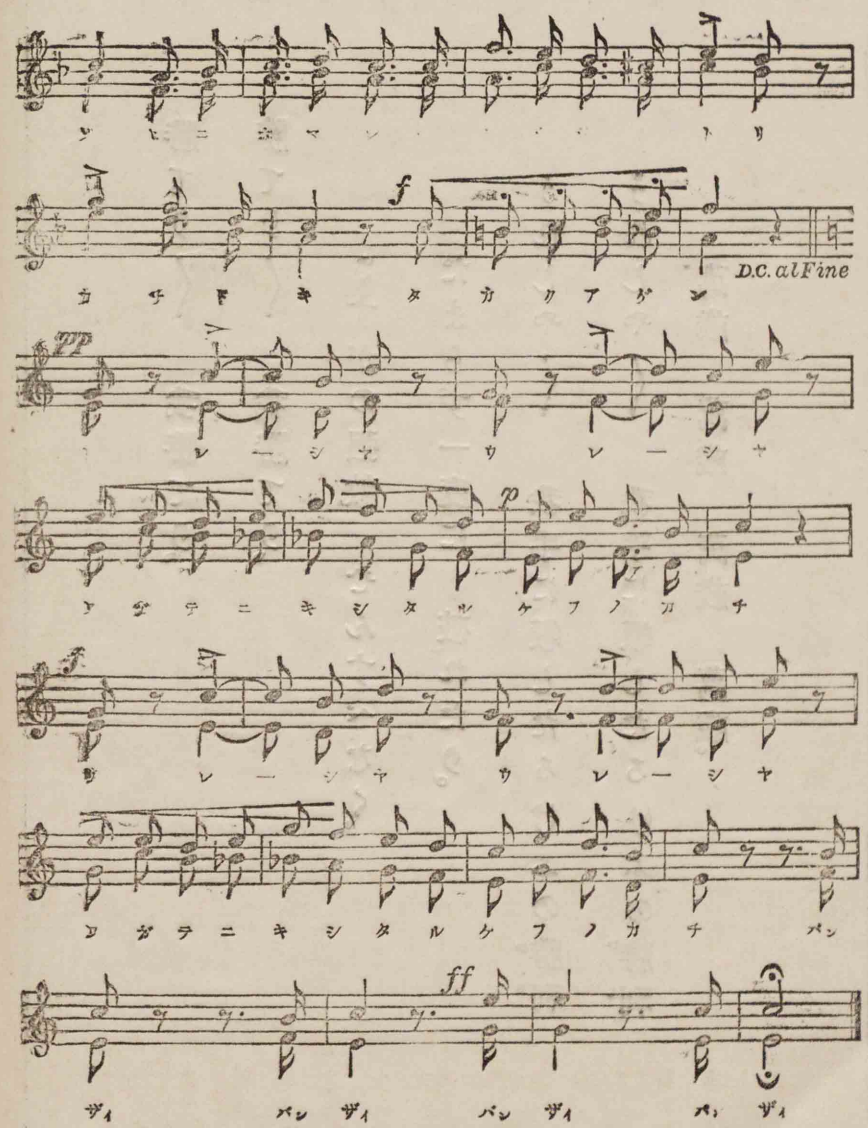
勝てり〳〵　我勝てり、
勝てり〳〵　我勝てり、
さすがの强敵　せんすべなく、
たまらず一度に　破れたり。
うれしや〳〵　我手に皈したるけふの勝利
うれしや〳〵　我手に皈したるけふの勝利
萬歲　萬歲　萬歲　萬歲。

競　技

〔說示〕轉調せられたる曲節が、長き小節間繼續する場合には、調號を變換する事あり。(當樂譜第五段以下を視よ)



競　技(つゞき)



第三十教　總說の二（音階論復習補說）

〔問題〕一、長音階とは如何。

二、嬰種長音階構成法とは如何。

三、變種長音階構成法とは如何。

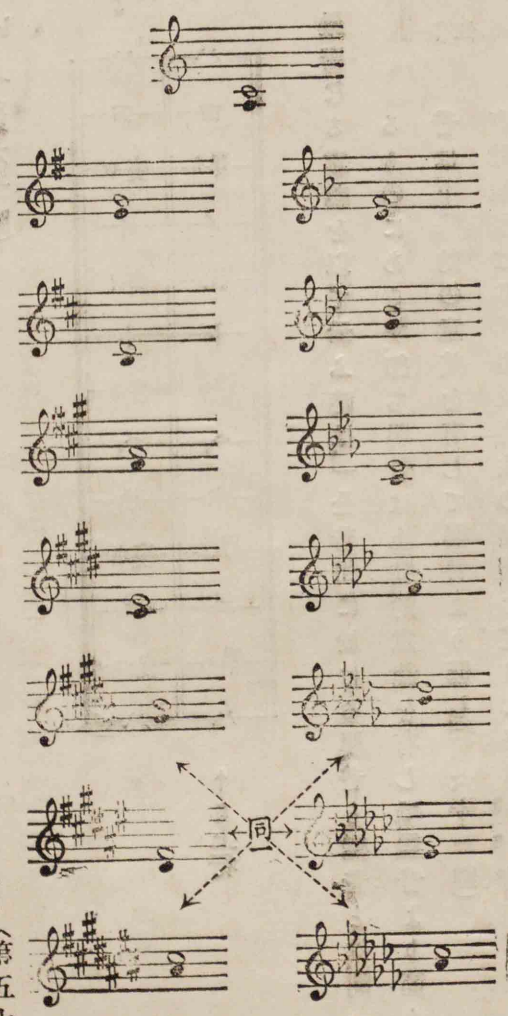
四、短音階の主音は、其關係長音階の第何度に有りや。

嬰種長音階は、ハ調よりト調を得、ト調よりニ調を得るが如く、順次上方五度に之を構成する事七回に及べば、嬰ハ調に至りて、其音階中の七音悉く嬰音と成るに至るべし。（第五十九圖）

變種長音階も亦、順次に之を構成する事七回に及べば、七音悉く變音なる、變ハ調を得るに至るべし。（第五十九圖）

されば嬰變種長音階の種類は、合せて十四個（ハ調を除く）と成るの理なれども、其内「ロ調と變ハ調」、「嬰ヘ調と變ト調」及び「嬰ハ調と變ニ調」とは、各之を異名同一のものと見做し得るを以て、結極調を異にせる長音階は、ハ調の外十一種なりと云ふを得べし。（第五十九圖）

第五十九圖



嬰種及び變種短音階の種類及び其各調の調號は、右の圖（第五十九圖）によりて之を推知すべし。

圖に於ける白符は、各調長音階の主音を示し、其下なる黑點は、關係短音階の主音を示せり。

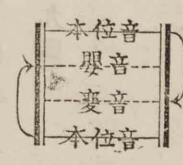
全音階　長音階及び短音階の如く、全音の多數より成る所の音階を、**全音階**といふ。

半音階　全音階中の全音を、各々二個の半音に分ちたるものを**半音階**といふ。（第六十圖）

第六十圖

四分音　嚴密なる意義を以て云ふ時は、一全音間に於ける嬰音と變音とは、同一なるものにあらず。即ち嬰音は上登的意義を有して、變音より高く、變音は下降的の意義を有して、嬰音より低し。（第六十一圖）

第六十一圖



有鍵樂器は、其構造及奏法の復雜を避けんが爲、平均律として、嬰音をも變音をも、同一鍵を以て奏すべき樣、調律せらるゝを以て、之を區別し能はずと雖も、人聲若くは絃樂器等に於ては、奏唱者の意思によりて、之を區別し得るものとす。此の如き音を稱して**四分音**と云ふ。

〔問題〕五、長音階と短音階との音列の差別如何。

音樂と音階　凡そ樂曲は、國土の別、時代の差等によりて、其音階の**形式**（即ち樂曲を組織する所の樂音の排列順）を異にせり。

西洋音樂の音階と、日本音樂の音階とは、其形式等しからず。

今の西洋音樂と、昔の西洋音樂とは、また其音階の形式を異にす。

而して近世の西洋音樂は、專ら既習の長音階若くは短音階より成るものとす。

なほ少しく細說せんに、半音階は古來支那及我邦に於ても、十二律と稱せられ、普通の意義に於て、凡ての樂曲は、この十二個中の音が、如何樣にか相繼承結合して成れるものと認めらるゝ所なり。さて、この樂音の繼承する樣は、曲によりて千差萬別なるが如けれども、委細に之を檢する時は、國々時代、の樂風、樂曲の性質によりて、又必ず定まりたる形式（例令へば某音より某音に移り、又は某音に止る等の定法）あるものなり。音階とは即ち學者が種々の樂曲に就き、この樂音繼承の樣を調査して、綜合し得たる所の典型に外ならず。而して今の西洋音樂は、長音階及び

短音階なる二種の典型によりて成れるものたるなり。

今、更らに表を以て、既習の諸音階を示さん。……（調を異にせる音階の名は多けれども、皆長音階若くは短音階の何れかに外ならぬを見るべし。）

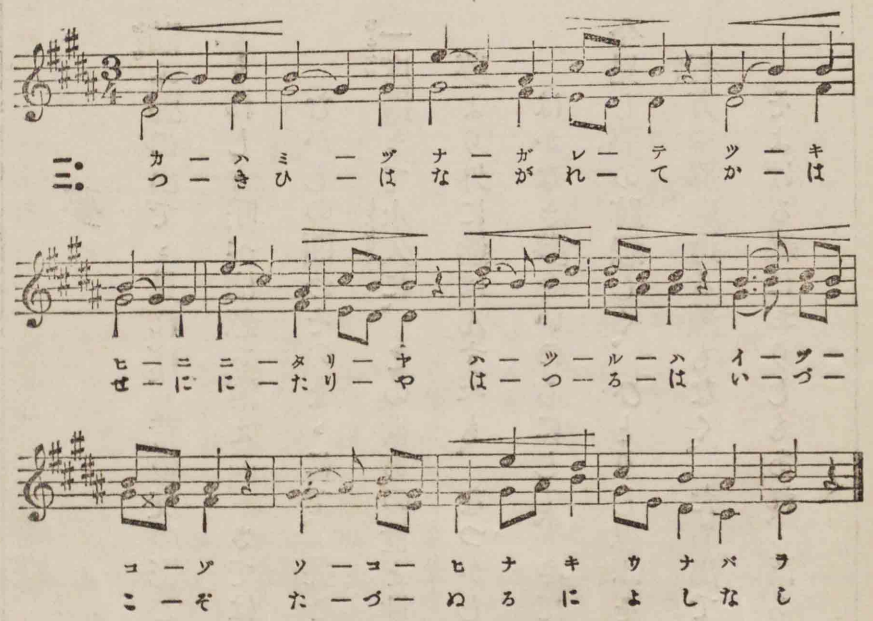
（日本音樂の音階に就ては、第四卷に詳かなり）

- 音階
  - 全音階
    - 長音階
      - 模範、一……ハ調（調號を有せず）
      - 嬰種、七
        - ト調（一嬰）、ニ調（二嬰）、イ調（三嬰）、ホ調（四嬰）。
        - ロ調（五嬰）、嬰ヘ調（六嬰）、嬰ハ調（七嬰）、
      - 變種、七
        - ヘ調（一變）、變ロ調（二變）、變ホ調（三變）、變イ調（四變）、
        - 變ニ調（五變）、變ト調（六變）、變ハ調（七變）、
    - 短音階
      - 模範、一……イ調（調號を有せず）
      - 嬰種、七
        - ホ調（一嬰）、ロ調（二嬰）、嬰ヘ調（三嬰）、嬰ハ調（四嬰）、
        - ト調（五嬰）、嬰ニ調（六嬰）、嬰イ調（七嬰）、
      - 變種、七
        - ニ調（一變）、ト調（二變）、ハ調（三變）、ヘ調（四變）、
        - 變ロ調（五變）、變ホ調（六變）、變イ調（七變）、
  - 半音階
    - 半音階は、たゞ樂音の細分にして、悉く半音より成れるものなれば、那處より始むるも同一にして、主音と定むべきものなし。即ち長短兩音階の如く、樂曲構成の典型と成るものにはあらず、たゞ裝飾的に、長短音階より成れる曲中に混用さるゝのみ。

川邊に立ちて

〔設問〕一、當曲は何調なりや

二、曲尾より五小節目なる×の記號は如何。



川邊に立ちて

一、川水流れて
月日に似たりや、
泊つるは何處ぞ
底ひなき海原。

二、月日は流れて
川瀨に似たりや、
泊つるは何處ぞ
たづぬるによしなし。

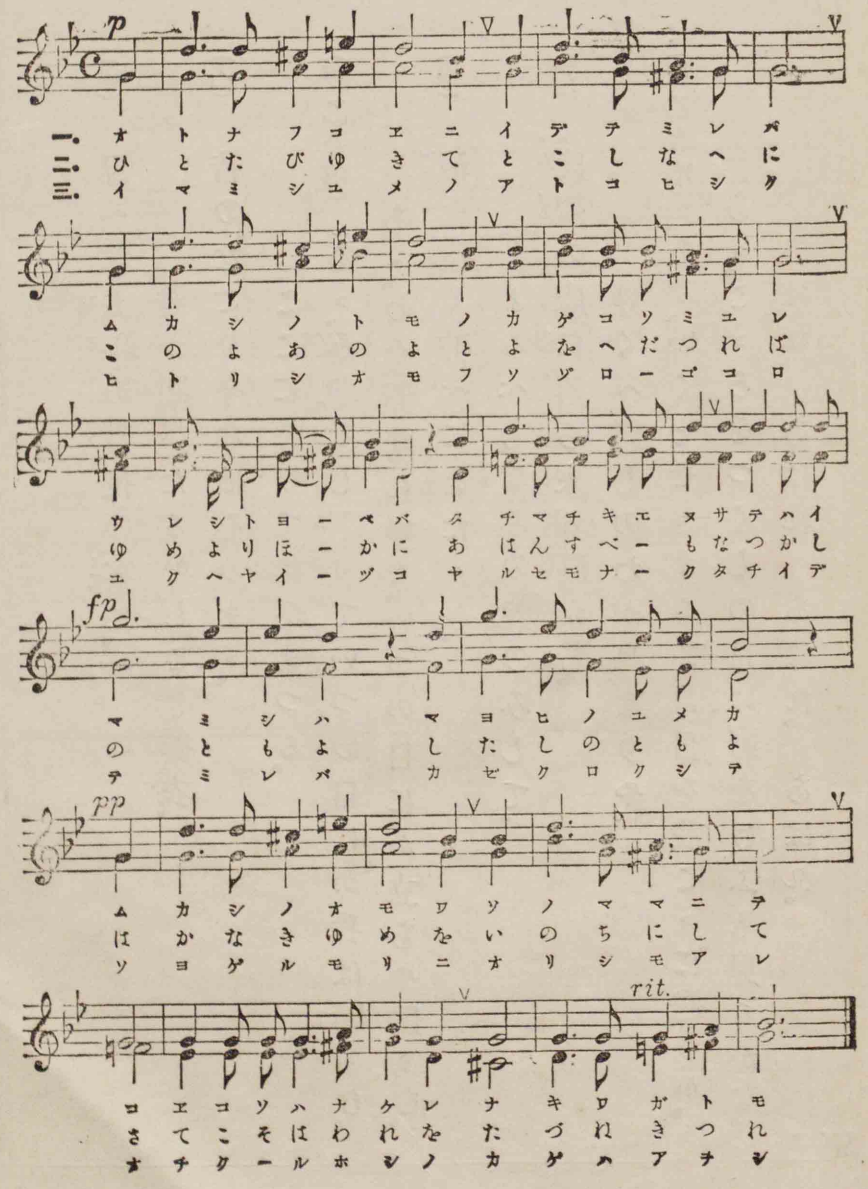
夢

一、訪ふ聲に出でゝ見れば、昔の友の影こそ見ゆれ、
うれしと呼べば忽ち消えぬ、さては今見しは迷ひの夢か、
むかしの面わそのまゝにて、聲こそはなけれ亡きわが友。

二、一度逝きて永久に、この世あの世と世を隔つれば、
夢より外に逢はんすべも、なつかしの友よ親しのともよ、
はかなき夢をいのちにして、さてこそは我を尋ね來つれ。

三、今見し夢の跡戀しく、ひとりし思ふそゞろ心、
行方や那處遣る瀨もなく、たち出でゝ見れば風黑くして、
そよげる森におりしもあれ、落ち來るほしの影はあをし。

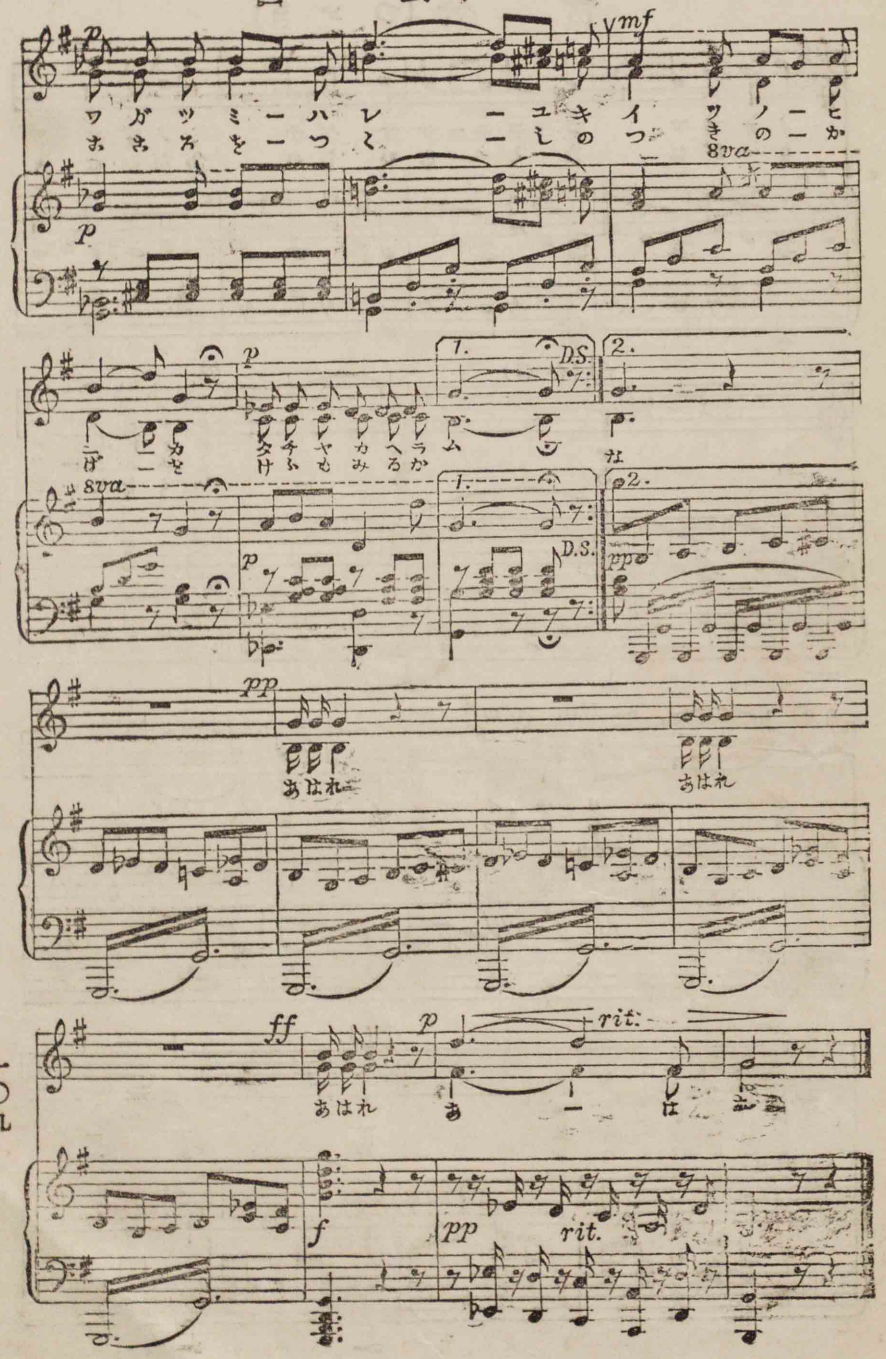
夢



菅　公

(甲)　思へば去年の月夜の宴に、
　　君が賜びたるかしこき御衣、
(乙)　昔のなごり今なほそのまゝ、
　　ここに棒げて偲びまつる。
(甲乙合唱)　あゝ、みゆるし下りて、いつの日にか我は歸らむ。
(甲)　漁火遠く沖べにまたゝき、
　　よるべもなみの聲のみして。
(乙)　寢覺の床に落ち來る雁が音、
　　ゆくへ戀しのわが身なりや。
(甲乙合唱)　あゝ、いくとせすらふ、月日を我こゝに送るか、
　　あゝ、こゝろをつくしの、月の影をけふも見るかな。
　　あはれ、あはれ、あはれ、あはれ。

菅　公(つゞき)



菅　公

(高声部)

オイ　モ　ヘ　バ　コ　ヅ　ノ　ツ　キ　ヨ　ノ　ウ　マ
さ　り　び　と　ほ　く　お　き　べ　に

タ　ー　ゲ　ニ　キ　ミ　ガ　ー　タ　ビ　タ　ル　カ　シ　コ　キ　ギ　ョ　シ
た　ー　た　き　よ　ろ　べ　ー　も　は　み　の　お　ぶ　の　み

(低声部)

イ　ム　カ　シ　ノ　ナ　ゴ　リ　イ　マ　ナ　ホ　ル　ソ　カ
て　ね　ざ　め　の　と　こ　に　お　ち　く　る

菅　公(つゞき)

ノ　ー　マ　マ　コ　コ　ニ　ー　サ　サ　ゲ　テ　シ　ノ　ビ　マ　ツ
り　ー　が　ね　ゆ　く　へ　ー　お　ひ　し　の　わ　が　み　な　り

(合唱)

ル　ア　ア　ー　ミ　ル　シ　ー　ク　さ
や　あ　あ　ー　い　ユ　と　せ　ー

ダ　ニ　テ　イ　ツ　ノ　ニ　ニ　ニ　ニ
ち　り　ふ　つ　き　ひ　ヒ　わ　カ　レ

ア　ア　ー
あ　あ

中等音樂教科書卷の三終

藤井藏書

明治四十一年六月十日印刷
明治四十一年六月十四日發行
大正十三年二月十五日十二版發行

甲、三

定價金八十錢

不許複製

編者　東京市外下目黑四二六　北村季晴

發行者兼印刷者　東京市外下目黑四二二　弘樂社出版部　代表者　佐藤辰巳

印刷所　東京市京橋區南金六町十二　英文通信社印刷所

發行所　東京市外下目黑四二二　弘樂社
（振替東京四五九五九　電話高輪一四三七）

廣島市堀川町本通
販賣所　花坪樂器店

1979.6.24

◎弘樂社出版音樂書概目◎

北村季晴著（文部省檢定濟）
○音程教則本（十二年度臨時定價）金廿六錢 送料金四錢

同
○中等音樂教科書（乙種）（同）
（卷一 金四十九錢 卷二 金四十七錢 卷三 金五十錢 卷四 金七十錢 送料各金四錢）

同
○中等音樂教科書（甲種）（同）
（卷一 金七十錢 卷二 金七十五錢 卷三 金八十錢 卷四 壹圓 送料各金四錢）

○縮冊ホーマン（卷一）定價 金四十錢 送料 金四錢

○ヴアイオリン三の位置教本 定價 金貳圓 送料 金十二錢

北村季晴作
○叙事唱歌第一篇 須磨の曲
○叙事唱歌第二篇 離れ小島
○叙事唱歌第三篇 露營の夢
（各 定價金五十錢 送料 金四錢）

○青柳振作編 ハーモニカ名曲集 定價 金五十錢 送料 金四錢

○弘樂社編 ポケット名曲集 定價 金三十五錢 送料 金四錢

北村邦樂譜
○第一篇 吉原雀 定價 金八十錢 送料 金四錢

北村季晴作
御伽歌劇 ドンブラコ 定價
（甲種（伴奏附）金一圓八十錢 送料金八錢
乙種（唱歌用）金壹圓 送料金六錢）

同
御伽歌劇 ピヨコ太郎 定價
（甲種（伴奏附）金一圓五十錢 送料金八錢
乙種（唱歌用）金四十五錢 送料金六錢）

同
對話唱歌第一篇 カクレン坊
對話唱歌第一篇 人形病院 各定價
（甲種（伴奏附）金八十錢 送料金八錢
乙種（唱歌用）金二十五錢 送料金二錢）

對話唱歌第三篇 ハイ々々息子

販賣所
東京 共益商社樂器店
同 山野樂器店
同 十字屋樂器店
大阪 三宅書店
同 三木樂器店
神戸 キド樂器店
京都 十字屋樂器店

文庫
0
324
8324
広島大学図書
0130458324